



繭 / COCOON
技術から思考するエコロジー

ジャン＝ルイ・ボワシエ / クワクボリョウタ / 西脇直毅 / florian gadenne + miki okubo / 石橋友也

Jean-Louis BOISSIER / KUWAKUBO Ryota / NISHIWAKI Naoki / florian gadenne + miki okubo / ISHIBASHI Tomoya

繭 / COCOON

技術から思考するエコロジー

繭とは、こう言ってよければ個体によって製造された、生まれたあとの卵である。

技術的な生まれたあとの卵としての繭は、テクノロジーについての近代的な考えをも反転させることを可能にしてくれる。

繭が具現化している技術の考えでは、世界を操作することは、自分自身の本性を手放すこと、その本性を外部に投影するのではなくみずからの内部で変化させることを可能にするものとなる。

技術は、生と対立したり生を外部へと延長したりするような力ではない。技術とは、生の最も内的な表現、その本来的なダイナミズムでしかない。

エマヌエーレ・コッチャ「メタモルフォーゼの哲学」第II部より

ごあいさつ

このたび「IAMAS ARTIST FILE #10 繭／COCOON：技術から思考するエコロジー」を開催いたします。

岐阜県美術館とIAMASとの連携事業「IAMAS ARTIST FILE」は、美術館を会場に、IAMASにゆかりのアーティストの作品や活動を紹介してきました。第10回目を迎える今回は、エコロジー問題を取りあげます。科学的知性と芸術的感性の融合を理念とするIAMASに関する作家たちが、今日の技術的状況をいかに理解し、表現に昇華するのか、世代や表現手段の異なる5組の作家をご紹介します。

「エコロジー」とは環境保全についての問いではなく、一人ひとりの生とそれをつなぐ社会、科学技術や文明の在り方そのものについての問いです。現代の人々は、技術は人間に固有であり、身体の拡張であると考えていることに慣れてしています。そうした技術観こそ、望ましくない帰結をもたらす人間中心的な考えを形作ってきました。

本展のタイトル「繭」は、イタリア出身の哲学者エマヌエーレ・コッチャが『メタモルフォーゼの哲学』で提唱した概念に依拠しています。「繭」の考えによれば、技術は人間に固有ではなく、あらゆる生命が世界ととりもつ関係性として定義されます。わたしたちは、近代的な技術観を乗り越え、あたかも完全変態を遂げる昆虫のように、みずからが変容すると同時に世界を再構築するような「生命と共にある技術」について考え始めることができるのです。本展が「技術」を通して「エコロジー」を新たに考えるきっかけとなれば幸いです。

本展の開催のために多大なるご協力を賜りました出展作家の皆様をはじめ、ご尽力を賜りました関係者の方々、各機関の皆様に、心より御礼申し上げます。

2025年1月
岐阜県美術館
情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

Greetings

We are pleased to present “IAMAS ARTIST FILE #10 COCOON: Thinking Ecology through Technics.”

“IAMAS ARTIST FILE,” a collaborative project between the Museum of Fine Arts, Gifu and IAMAS, has been held at the museum as a venue to introduce the works and activities of artists associated with the school. This year we welcome the 10th project and focus on ecological issues. We will introduce a group of 5 artists from different generations and unique means of expression to see how artists associated with IAMAS, whose philosophy lies in the fusion of scientific knowledge and artistic sensibility, comprehend the contemporary state of technology and sublimate it into their art.

“Ecology” is not a question pertaining to the conservation of the environment, but rather, it is about the very nature of every individual’s life and how we are connected through society, technology, and civilization. People today are accustomed to considering technology as inherent to human beings and an extension of the body. Such a view of technology has formed an anthropocentric idea that has led to undesirable consequences.

The title of this exhibition, “Cocoon,” is based on a concept proposed by Italian philosopher Emanuele Coccia in his book “Metamorphoses.” According to the idea of the “cocoon,” technics is not inherent to humans, but is defined as the relationship that all life has with the world.

We can overcome the modern view of technology and begin to think about “technology in harmony with life,” as if we were insects undergoing a complete metamorphosis—transforming ourselves while simultaneously rebuilding the world. We hope that this exhibition encourages you to consider “ecology” through “technics” into a new perspective.

We would like to express our sincere appreciation to all the exhibiting artists, as well as all the people and organizations involved who have made a tremendous effort to make this exhibition possible.

January, 2025
The Museum of Fine Arts, Gifu
Institute of Advanced Media Arts and Sciences [IAMAS]

繭／COCOON：技術から思考するエコロジー

展覧会

会場：岐阜県美術館 [展示室2]

会期：2025年1月10日 |金| - 3月9日 |日|

主催：岐阜県美術館、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

出展作家：ジャン＝ルイ・ボワシエ、クワクポリョウタ、西脇直毅、florian gadenne + miki okubo、石橋友也

協力：大久保拓弥、ギャルリー宮脇、塩澄祥大、竹内創、リアン・テリエ、西岡毅、福島諭、山田聡、IAMAS学生有志

広報デザイン：岡澤理奈

企画：鳥羽都子（岐阜県美術館）、大久保美紀（IAMAS）

02 ごあいさつ

04 展覧会概要

06 「繭」という技術：エコロジーを思考する芸術は可能か
大久保美紀

08 展示風景

12 ジャン＝ルイ・ボワシエ／Jean-Louis BOISSIER

18 石橋友也／ISHIBASHI Tomoya

24 florian gadenne + miki okubo

30 西脇直毅／NISHIWAKI Naoki

36 クワクポリョウタ／KUWAKUBO Ryota

42 芸術は繭である 鳥羽都子

44 ギャラリートーク

46 作品リスト

「繭」という技術：エコロジーを思考する芸術は可能か

第10回目となるIAMAS ARTIST FILEは、技術の問いからエコロジーを再考する芸術的挑戦である。情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] は、1996年に芸術アカデミーを、2001年にメディア表現研究科単科の大学院を設立して以来、最新の科学技術を吸収する先端的な芸術表現に取り組んできた。科学的知性と芸術的感性の融合を建学理念に掲げる本学の本領はとくに、最先端のテクノロジーが芸術と出会う「メディアアート」の領域において発揮されてきた。しかし、テクノロジーを用いた芸術をめぐる状況は、90年代から現在にかけて大きく変化し、「メディアアート」はすでに飽和・平庸化しているという見解すらある。科学的知性、先端のテクノロジー、高度な技術が邂逅するところであるこうした芸術は、一つの転機というべき局面を迎えている。「技術」をテクノロジーの側面からだけでなく、テクネーや芸術を含むアート、また西洋近代技術の枠組みでは捉えきれない多面的なものとして再認識し、技術について新たに考察することは、ますます避けがたくなっている。

「繭」をタイトルに掲げる本展に、私たちが真っ先に思い浮かべる類の繭——昆虫の成長過程において蛹を包み込んでいる構造物——を直接的に想起させる作品はない。そのかわり、「芸術は、繭である」という簡潔なフレーズによって、芸術との結びつきが示唆される。「繭」はしたがって、隠喩（メタファー）として与えられているのだが、その解釈は鑑賞者に向かって開かれている。たとえば、本展が参照項として明示しているのは、イタリア人哲学者エマヌエーレ・コッチャが『メタモルフォーゼの哲学』の第Ⅱ部で提唱する「繭」の概念である。彼によればそれは「生まれたあとの卵」*1であり、近代以降の技術観を転覆させる脱人間的な新しい技術への視座の足がかりとなる。一方、ベルナル・スティグレルの技術論にインスピレーションを受けた小説家アラン・ダマジオは、高度テクノロジーを環境として生きる現代世界の状況をTechno-Cocon（テクノロジーの繭）と表現した*2。そもそも、絹織物産業の根底を支えてきた養蚕業における蚕の繭は、昆虫の技術が人間の技術と結びつくことで人類の文明が可能になっていることを確認させる。「繭」を切り口として技術を問うことは、私たちが技術を新たに考えることを可能にする。

芸術表現を通じてエコロジー問題に対峙する「エコロジーアート」は、1970年代のディープエコロジーの提唱、89年のフェリックス＝ガタリによる『三つのエコロジー』を通じた精神・社会・環境の新たなエコロジー論を経て、地球規模の気候変動と生態系破壊が白日の下に晒された21世紀の芸術領域において、いわば至上命令であるかの如く平庸な主題となっている。

あそこには、環境問題としてのエコロジーを告発するもの、自然を擬人化して同情を促すもの、あるいは、非西洋文明の自然観に倣おうとするものなど、多様なアプローチがある。しかし、いかなる思考の転換

が、今日のエコロジー問題に対峙するうえで真に必要なかについて、芸術領域は未だ十分に思考してきていない。

技術について思考することは、エコロジー問題についての認識を根本的に作り替えることである。なぜなら、エコロジー問題は人類が自らを取り巻くものを自分の都合の良いように作り替えてきた「文明」のあり方そのものに根ざしている。そして、その根幹には、技術を自らの身体の延長とみなす、器官投影 [Organprojektion] 的な技術観が横たわっている*3。これまでの人類の文明とは世界を人間化してきた歴史であり、その帰結が今日の地球の状況であるならば、「繭」がするように世界と関わる——自らを内部で作り替え、世界との関係を結び直すことで、自己と世界の間を再構築する——という新たな技術の思考に意味を見出さないわけにはいかない。

芸術（アート）の語源は、ラテン語の ars（アルス）であり、それはギリシャ語の τεχνη（テクネー）、すなわち「技術知」であることはよく知られている。それは、生きる上で重要な「ものづくり」に必要な知識や能力を意味する。技術の歴史は、そうした「ものづくり」の知を細分化・専門化することによって、先端科学技術を発展させたが、始原において同じものであった芸術をあまりに遠ざけてしまった。咎められるべきは、「繭」の忘却である。すなわち、技術の本質は生きるためのわざなのである。その気づきに、私たちは、芸術（アート）という技術を通じて、私たちを取り巻く世界との関係を結び直すことを知るだろう。

*1 | エマヌエーレ・コッチャ『メタモルフォーゼの哲学』松葉類・宇佐美達朗訳、勁草書房、2022年、pp.68-69。

*2 | フランス人作家アラン・ダマジオが著作『Vallée du silicium』（2024）で使用した表現。テクノロジーに依拠した資本主義社会を批判し、デジタルの泡に守られた世界 [Techno-cocon] からいかに脱却し、直接的行動によって世界との関係性を再構築する重要性を説いた。

*3 | 器官投影 [Organprojektion] とは、あらゆる技術的対象を生体構造の外部への投影と見做す考えである。1877年にエルンスト・カッパが技術哲学の基本路線を示した著作において提唱され、道具とは人間の身体機能を補助・増強するものであると理解する考えの基本となっている。

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

大久保美紀



IAMAS ARTIST FILE #10
COCOON: Thinking Ecology through Technics

繭 / COCOON

技術から思考するエコロジー

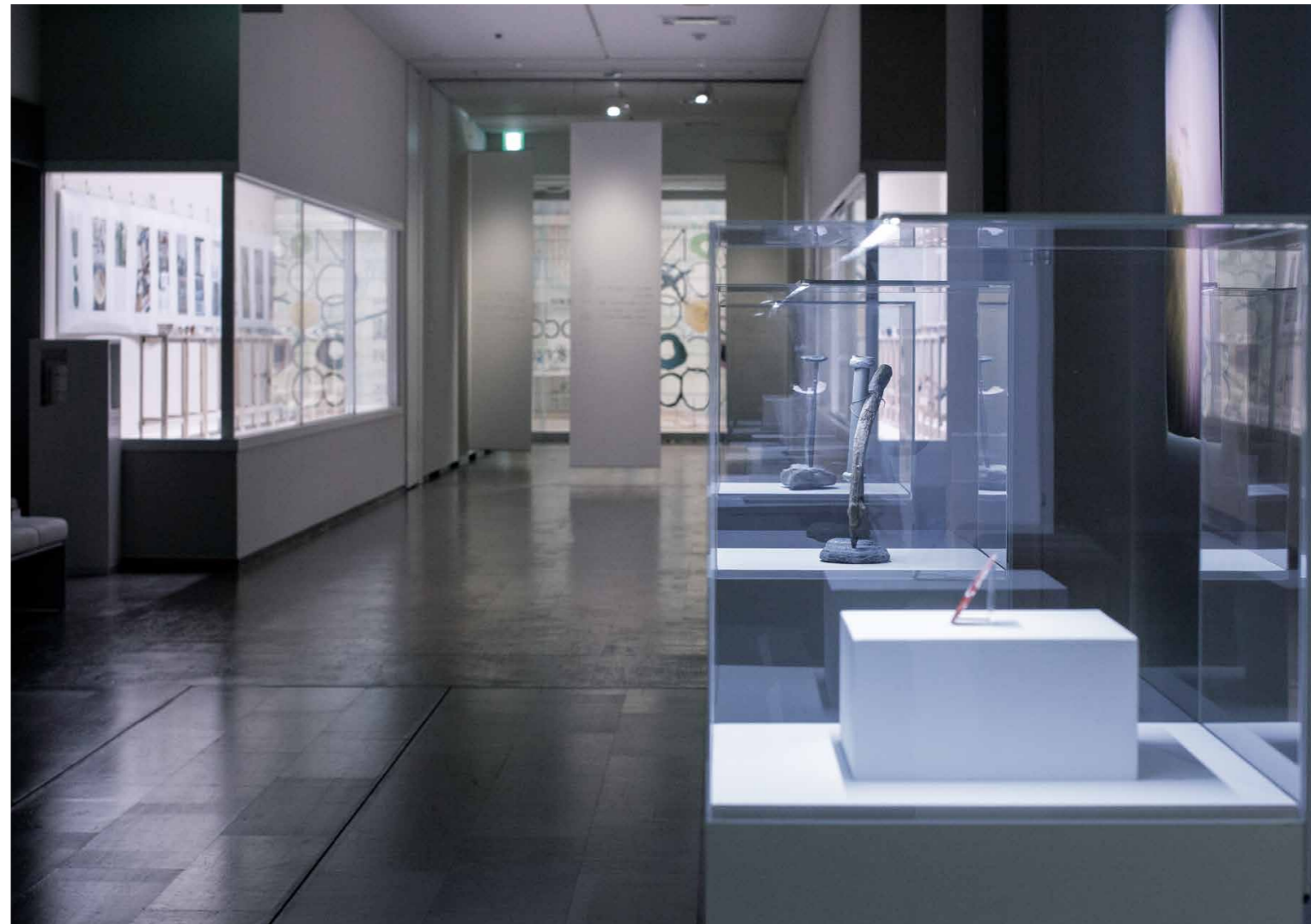
ジャン＝ルイ・ボワシエ / クワクポリョウタ / 西脇直毅 / florian gadenne + miki okubo / 石橋友也

2025.1.10_{fri.} - 3.9_{sun.}

入場料：一般 340(280)円 大学生 220(160)円 高校生以下は無料
(円空大賞展・所蔵品展のチケットで入場できます)

岐阜県美術館 展示室2

芸術は、繭である



ジャン＝ルイ・ボワシエ

Jean-Louis BOISSIER

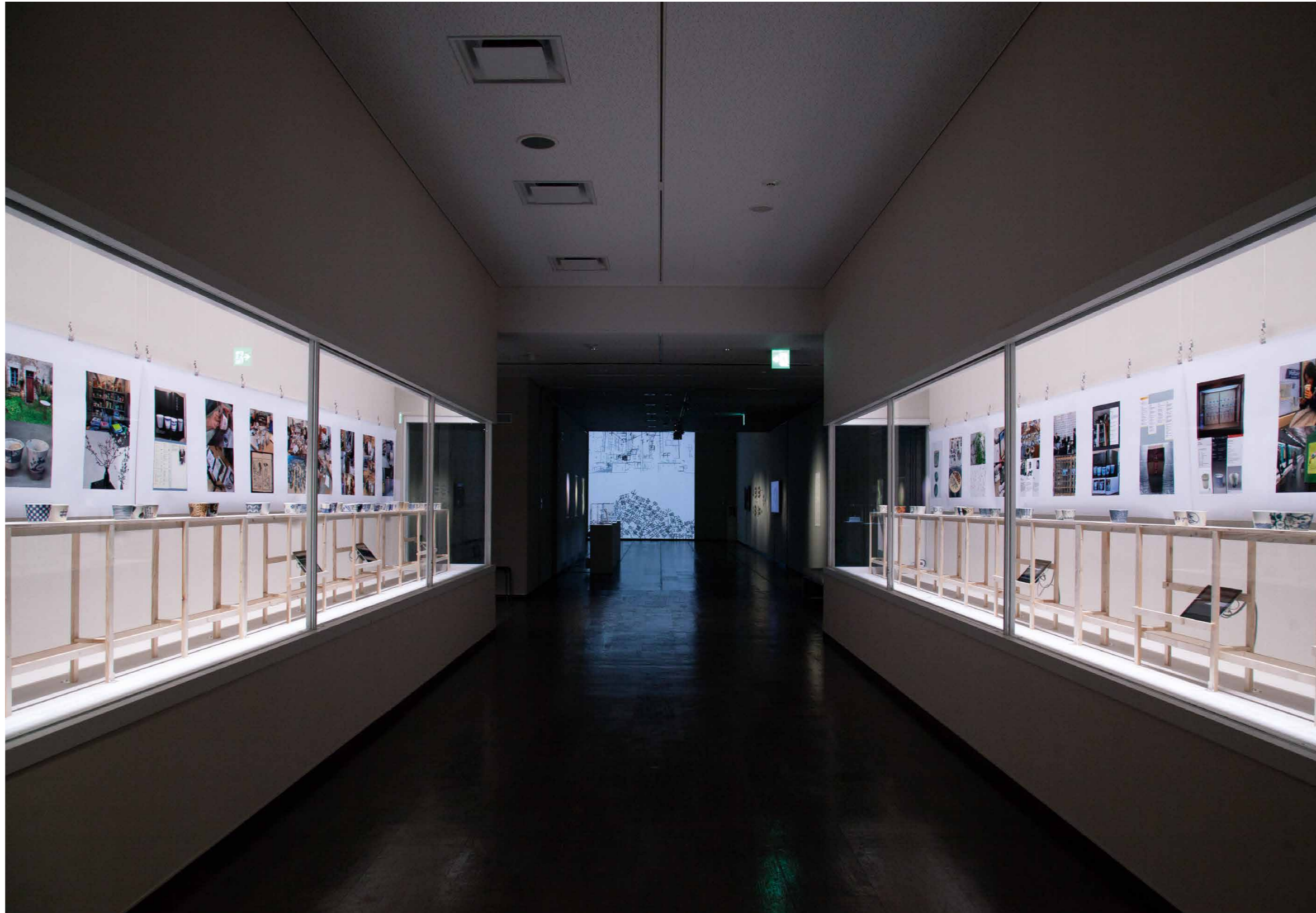
1945年生、パリ第8大学名誉教授。1980年代からメディアアートの分野で、アーティスト、研究者、キュレーターとして活動。1997年にIAMASで実施したワークショップをはじめとし、IAMAS教員や学生と数多くの協働歴がある。ルソーの著作の解釈やモノの生と記憶を扱う作品を制作。主著に『L'écran comme mobile』(2016)など。

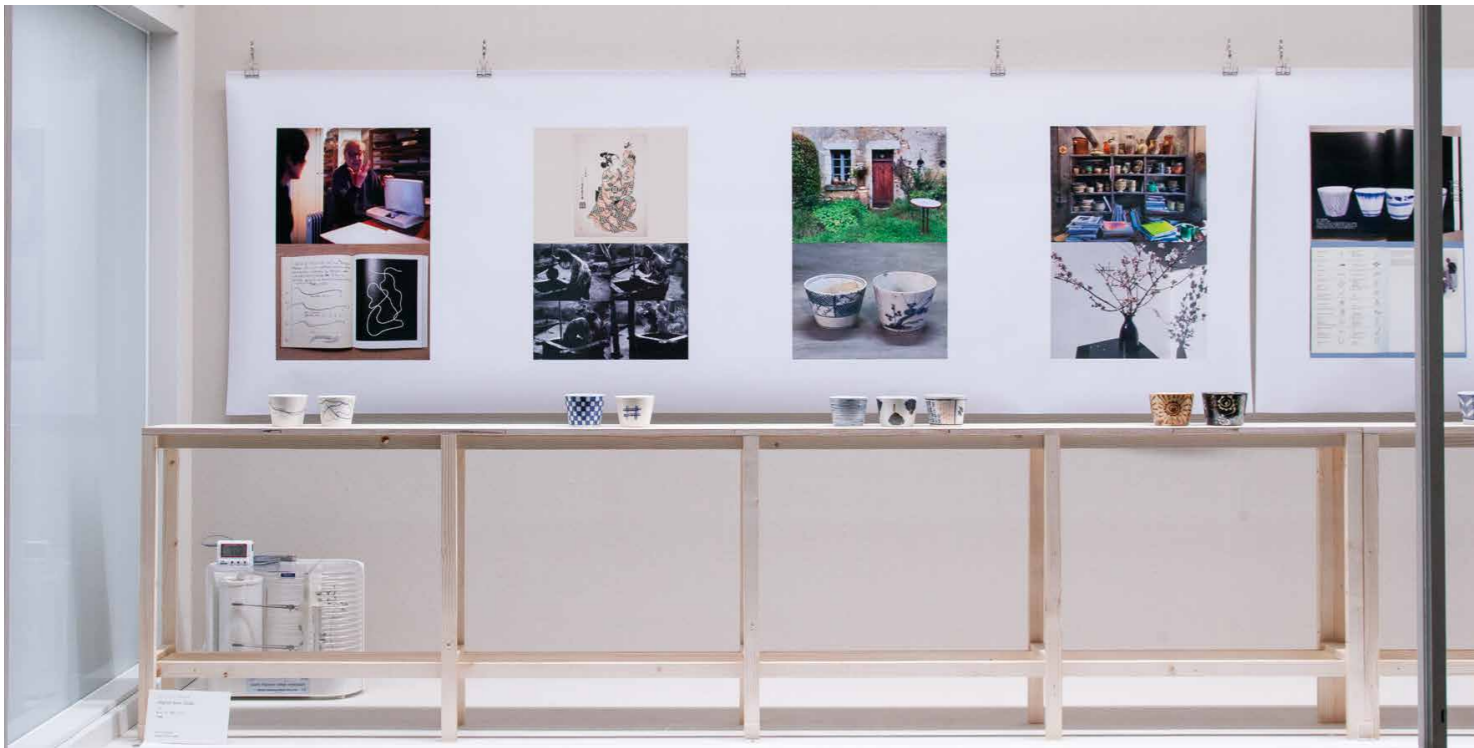
アートにインタラクティブ性を導入した先駆者の一人として、80年代以降に普及したニューメディアを手段に新たな芸術体験を追求してきた。本展では「蕎麦猪口」という日本の器について、その文化性・芸術性・技術性を問うプロジェクト《(digital) Soba Choko》の研究成果を展示する。

タイトルの「digital」は「数」と「指」に関わる両義的な意味をもつ。本作は、このオブジェが伝統的に人々の手技による陶器として作られると同時に、その截頭錐体(せつとうすいたい)の寸法が安定した比率(高さ:底辺:幅=6:6:8)をもつことに着目する。わたしたちが「技術」と呼ぶもの—機械技術と工芸的な技芸—は、その根源において、ものづくりにいかに関わるのか。

Born in 1945, Professor emeritus at the University of Paris VIII, Jean-Louis Boissier has worked as an artist, researcher, and curator in the field of media art since the 1980s. Starting with a workshop held at IAMAS in 1997, he has had numerous collaborations with IAMAS faculty and students. He produces works that deal with the interpretation of Rousseau's writings and the life and memory of objects. His main books include "La relation comme forme"(2009) and "L'écran comme mobile" (2016).

As one of the pioneers who introduced interactivity into art, he has been pursuing new artistic experiences by means of new media that has become widespread since the 1980s. This exhibition presents the research results of his project "(digital) Soba Choko," which calls into question the cultural, artistic, and technological aspects of the Japanese buckwheat noodle bowl. The title "digital" has ambivalent meanings related to "digit" and "finger." This work focuses on the fact that this object is a traditional hand-made pottery, and at the same time, the dimensions of its truncated cone body have a stable ratio (height:base:width = 6:6:8). What we call "technology"—both mechanical technology and the craftsmanship of traditional arts—at its core, how is it related to the act of creation?





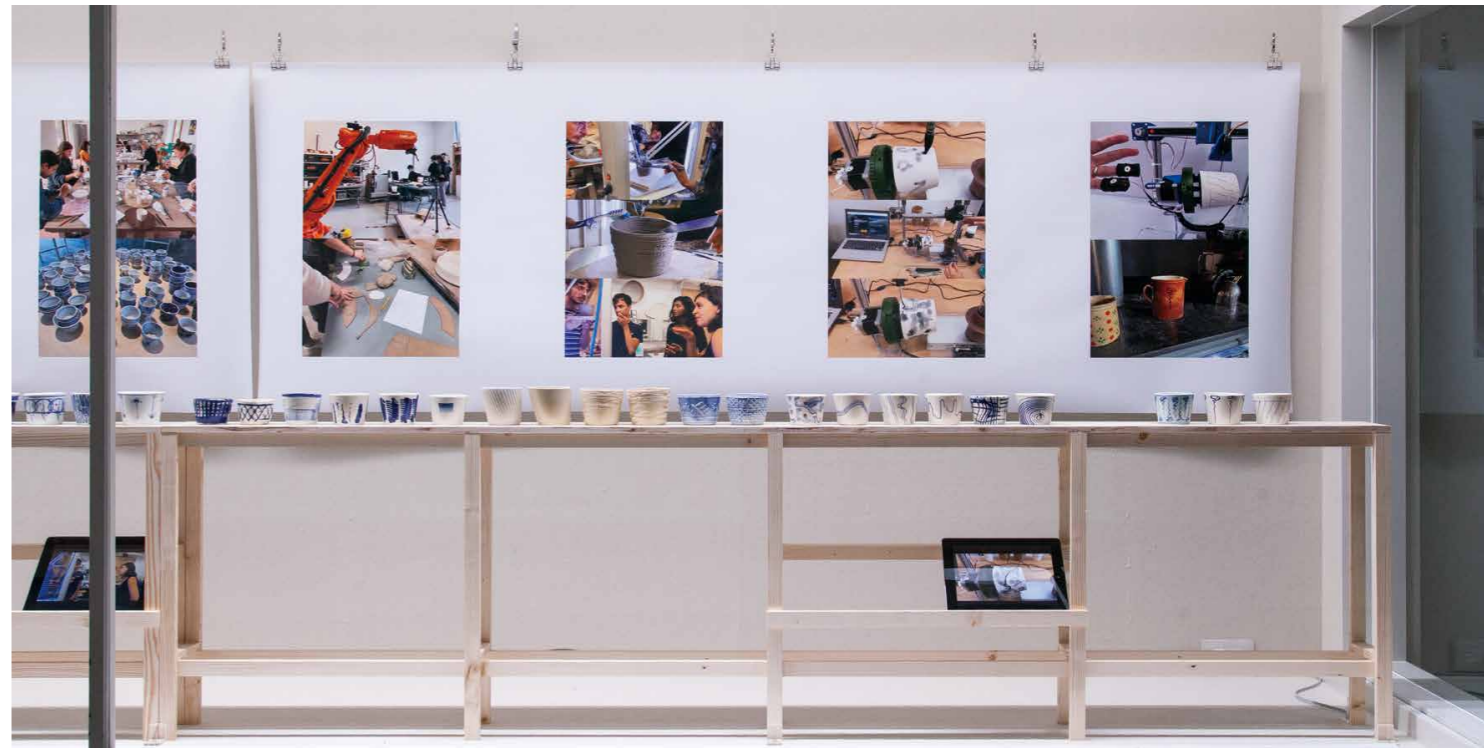
j-1

01 手で考える
 (digital) Soba Choko という集 体的 体験 は、フランス語で「触れる」「数える」「見せる」を意味するデジタルという言葉 を考案した。ジャン＝リュック・ゴダールは晩年の映画『イメージの本』(2018)について、指で数えながら手で考えたと言っている。パウル・クレールのリレーショナル・トレーシングやアニ・アルバースの作品もその一例である。

02 蕎麦猪口
 この盃は、実は蕎麦を食べるための実用的な器ではなく、蕎麦猪口という固有名詞をもつ。歌舞伎役者の佐野川市松が着ていた文様を「市松」というように。私たちのコレクションは、盃が登場する劇のようなものである。番号記号「#」は「井」の字とも読めるのだが、溝口健二監督の映画『雨月物語』のように、良い出会いをもたらすと同時に、悲劇的な状況の舞台にもなる。

03 ラ・ボルス
 民藝運動を支持するのは大衆芸術だけではない。フォークアートの運動はフランス中部に位置するラ・ボルスに代表され、20世紀には陶芸家たちが中心となって復活を遂げた。パーナード・リーチの弟子である英国生まれの陶芸家クリスティン・ペドリーは、1974年に来日し、益子の濱田庄司の窯を訪れた。持ち帰った磁器のうち2つが蕎麦猪口であることに彼女は気がついた。

04 クリウスクラ
 ここで、日本のオブジェがいかにか「翻訳」されたのか、その一例を紹介しよう。フランス南東部に位置し、伝統的な釉薬のかかった陶器のデザインを復活させた村、クリウスクラの陶器工場の陶芸家たちは、蕎麦猪口によく似たカップを独自に制作した。



09 手作業と機械工
 ナツコ・ウチハによる陶芸ワークショップ、そして、フェリックス・アジッドとイアニス・ラレマンによる非常に物知りな大型ロボットを使用した「メカトニック・コンピューショナル・デザイン」という特筆すべきワークショップが2020・2022年の2回にわたってル・マンのアート・デザイン学校で開催された。どちらの手法もプリミティブで戯画的な趣あるカップをもたらすが、アイデアと結果の矛盾を明らかにし、その背景や状況について考えるヒントとなる点で興味深い。

10 文様のレリーフ
 キャロリーヌ・ザードによるセラミックプリンターに代表される機械の美的貢献に関する研究は、私たちにとって重要であった。2022年にオレアンのアート・デザイン学校で行われたワークショップでは、「私のカップ」と題された。便利なワークショップでは、ナイフや歯ブラシを使ったユーモラスな手作業の介入によって機械のプログラムに挑戦するなど、立体的な構成を文様として立ち上らせる方法を見出した。

11 私の軌跡
 初歩的であることは欠点ではなく、知ることとシンパリーの原則である。2023年、ナンシー国立高等芸術デザイン学校で行われた2つのワークショップは、「私のカップ」と題された。便利なワークショップでは、しばしばエコロジーの解決策を装ったグリーンウォッシュの名目で売られているが、デジタル自動製造の恩恵を受けつつも、オリジナルティがあって愛着を感じられる「私のカップ」でありうる。アレクサンドル・ブルグノニは、作者のコントロールのもとで筆やフェルトペンでカップに装飾を施す小さな機械を作ることで、これを可能にした。

12 デジタルの波
 2013年、京都で行われた森公一が主催する研究会で、私たちは芸術における脳波の利用について話し合った。竹内創と私は有田から、筆遊びを思わせる文様をもつ蕎麦猪口を連れて帰ってきたところだった。皮肉なことに、私たちは脳の文様が描かれた磁器を思いつた。(digital) Soba Choko プロジェクトはそこから始まった。このプロジェクトはさまざまな方向に進んできたが、ナンシーの小さなプリンターによって、指の電気的変化をリアルタイムでとらえることができるようになった。

j-1



j-1

05 民藝からSuper Normalへ
 2006年、柳宗悦の息子であり、日本の伝統工芸を近代化した偉大なデザイナーであり、自らも民藝館の館長を務めた柳宗理は、深澤直人とジャスパー・モリソンの展覧会「Super Normal」を好意的に評した。デザイナーからショップまで、世界中から選ばれた実用的なオブジェのコレクションである。民藝が担っていたであろうソフトパワーの効果を垣間見ることができる。そこには、無印良品のポスト民藝志向もある。印象的なのは、装飾的なモチーフがすべて禁じられているように見えることだ。数点含まれている有田の蕎麦猪口を除いては。

06 文様づかい
 蕎麦猪口は、文様なしには民藝たりえなかった。柳宗悦によれば、ごく小さな表面に描かれる文様の数は数百にのぼる。この筆づかいのすばらしさを否定する輩があるはずはなく、一般的な模様でさえ同じものを二つと見つけるのはほとんど不可能だという。江戸時代の蕎麦猪口は、形状とその比率が固定化され、文様が多様化した。伝統的に標準化されたこのような集合を知らないはいられない。

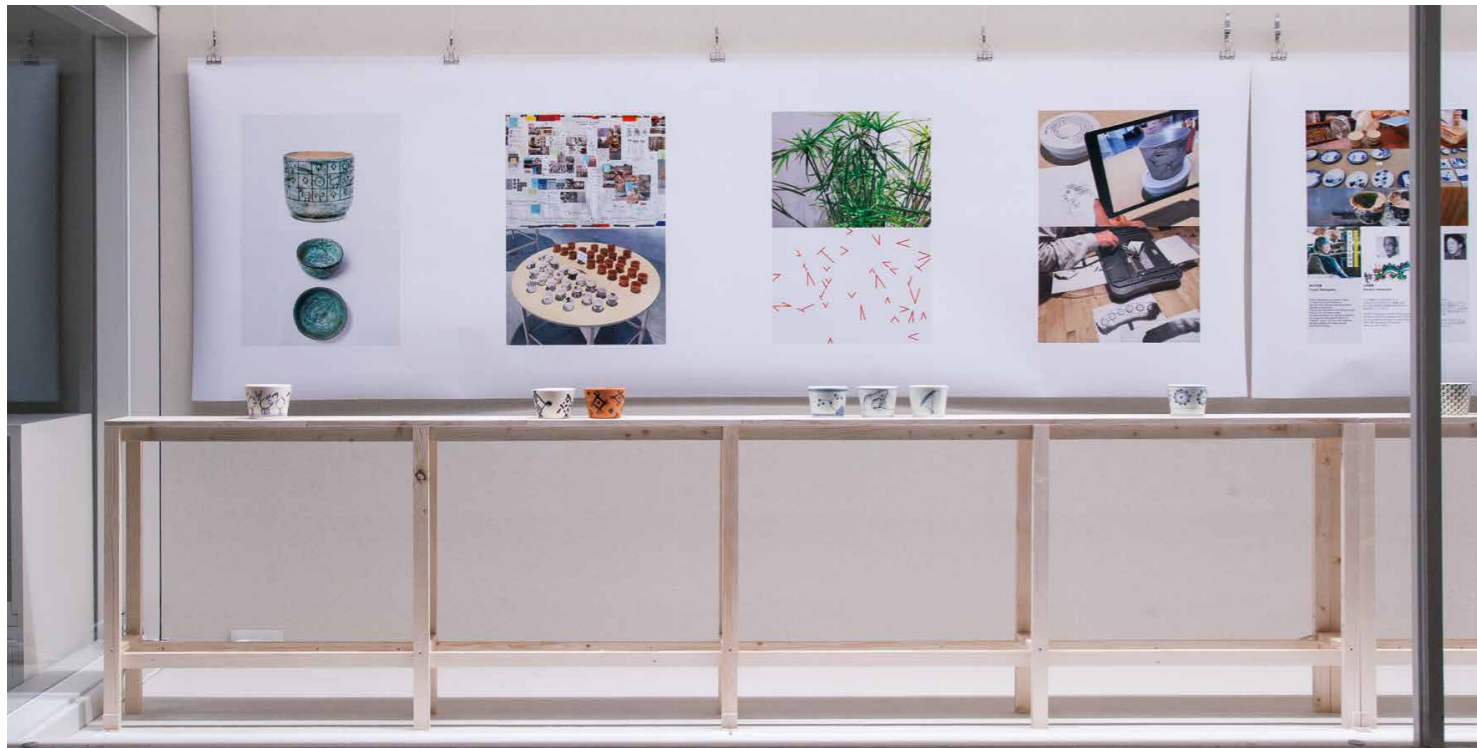
07 「猪口グラフィ」
 蕎麦猪口はメディアであるため、製図家や画家に差し向けられている。「猪口グラフィ」という言葉は、陶芸家ではない芸術家たちが蕎麦猪口の制作過程に介入する事実と焦点を当てるために生みだされた。この言葉は、テキストとドローイングの組み合わせによる特異性の追求という、アーティストの業欣の実践にも重なる。

08 量産する
 猪口の制作、磁器のロクロ成形、コバルトブルーによる装飾といった大変な努力を強調し、制作の詩学は量に宿ることを示す必要があった。量産は、完璧さであると同時に、それが多様性や独自性をもち、民主的なオブジェであることを意味する。2022年、ラ・ボルス現代セラミックセンターにおいて、陶芸家クレール・リナールとアンヌ・ルヴェルデによる学生を対象とした2つのワークショップが開催された。



12 「デジタルの波」より展示作品

j-1



j-1

13 コピーのコピー

今日フランスでは、アンティーク・ディーラーやコレクターが、青みがかった色調と黒い線画が刻まれた陶器の壺を売っている。50年代から70年代にかけて、小企業の社長であり美術工芸連盟の理事でもあったジャック・ブランが、画家のジャン・ルスタンとともにデザインしたものだ。古代エジプトの陶器や、より一般的には民族誌の象徴的な人物から引用した結果、彼らの巧みなスタイルが流行した。今度は蕎麦猪口がそれを模倣する。

14 サラ・ウハドゥ

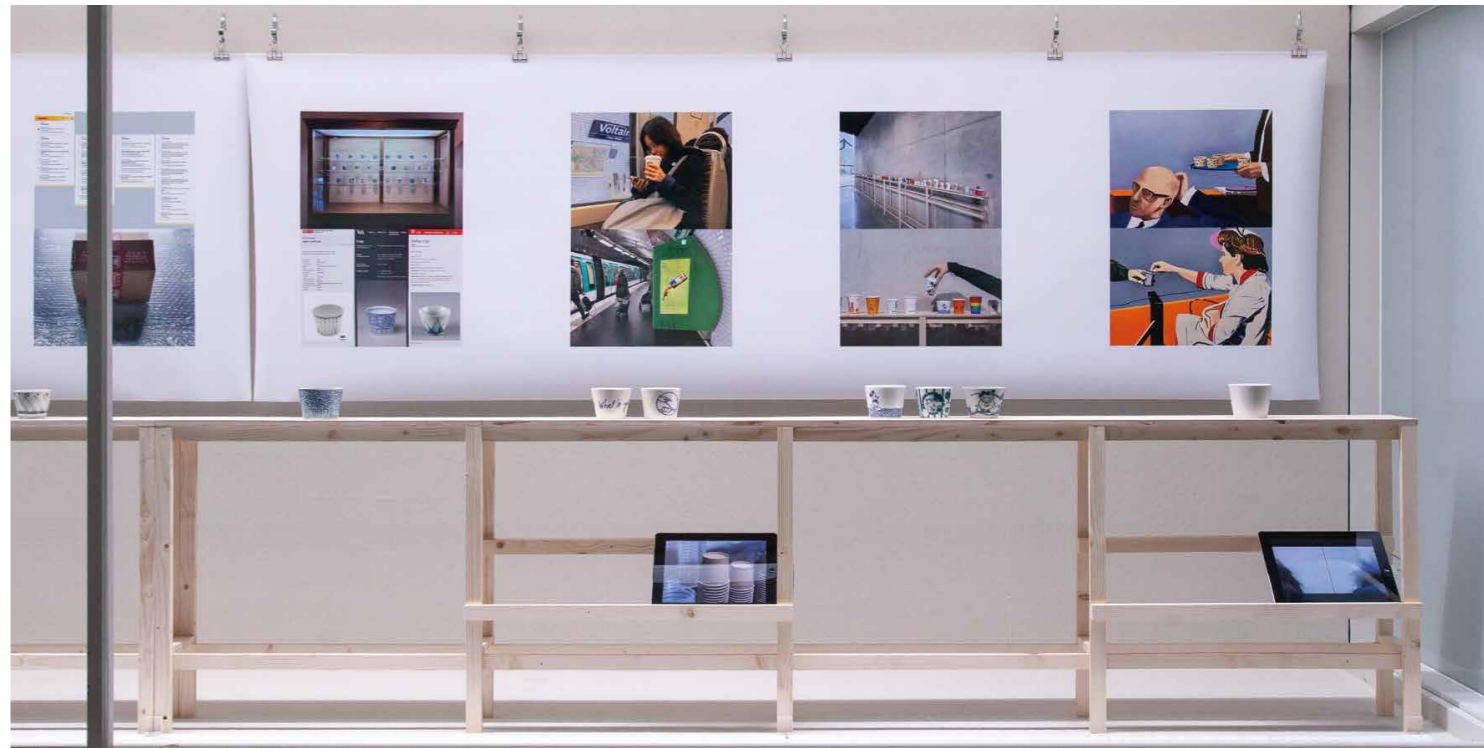
2022年にパリ日本文化会館で開催された展覧会「Les êtres lieux」では、モロッコと日本に見られるモチーフの形と意味の対応関係が紹介された。インスタレーション、刺繍、スタンドグラス、陶器など、すべての作品でモロッコの家族をモチーフにしているこのアーティストは、日本を訪れたことがきっかけで、共通点を探るようになった。2023年、ショーモン・ル・シーニエでの展覧会に招かれ、マラケシュの陶芸家たちと蕎麦猪口風の作品を制作した。

15 植物のエキリチュール

人間を含む動物の文化は、形の論理に関しては、植物と接触することから始まった。2016年、アルル写真学校にてキャロリーヌ・ベルナルとともに行った、人工知能の形状認識についての実験では、「竹」という漢字および、アルファベット記号としてのカミガヤツリ [papyrus] の分岐に注目した。デジタルは、植物の生命の法則を伝えるものであり、文様生成のコードとして理解できる。このような目録から、蕎麦猪口の読み解きが始まるのである。

16 マトリックスとしての蕎麦猪口

2022年、竹内創と真下武久は、そのスクリーンで撮影されたイメージを纏う架空の蕎麦猪口をモバイルスクリーンに出現させることのできるARデバイスを開発した。2023年のショーモン・ル・シーニエにおける展覧会では、リリアン・テリエによるコピー・アート版画が、蕎麦猪口の表面にパノラマとして展開し、茶室の構成を思わせるインスタレーションが実現された。



21 博物館検索

博物館のコレクションのオンライン閲覧は勉強になる。世界最大級の食器コレクションを誇るロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館には、蕎麦猪口が1点しかないようだ。大英博物館が、佐賀県立九州陶磁文化館の一室で驚くべきコレクションを展開する裕福な日本人夫婦からそのコレクションの一部を譲り受けたと記載されているが、その痕跡はない。ジュネーブ民族誌博物館によると、1955年に「日本とジュネーブの素朴な陶磁器」の交換があったという。この2つのタイプは性質が大きく異なる。しかし、そこにも蕎麦猪口はある。

22 モバイルの遷在性

10年前に撮影された「Atlas du gobelet」は、紙コップを中心にした写真シリーズである。片手にスマートフォン、もう片方の手にコップを持っている人をよく見かける。この2つの移動可能な容器は、身体の補綴物である。コップのモビリティは問題視されており、スターバックスはコップに客の名前を書くことで紙コップが捨てられないようにしている。蕎麦猪口には、ポイ捨てをしないよう警告する国際的ロゴはない。

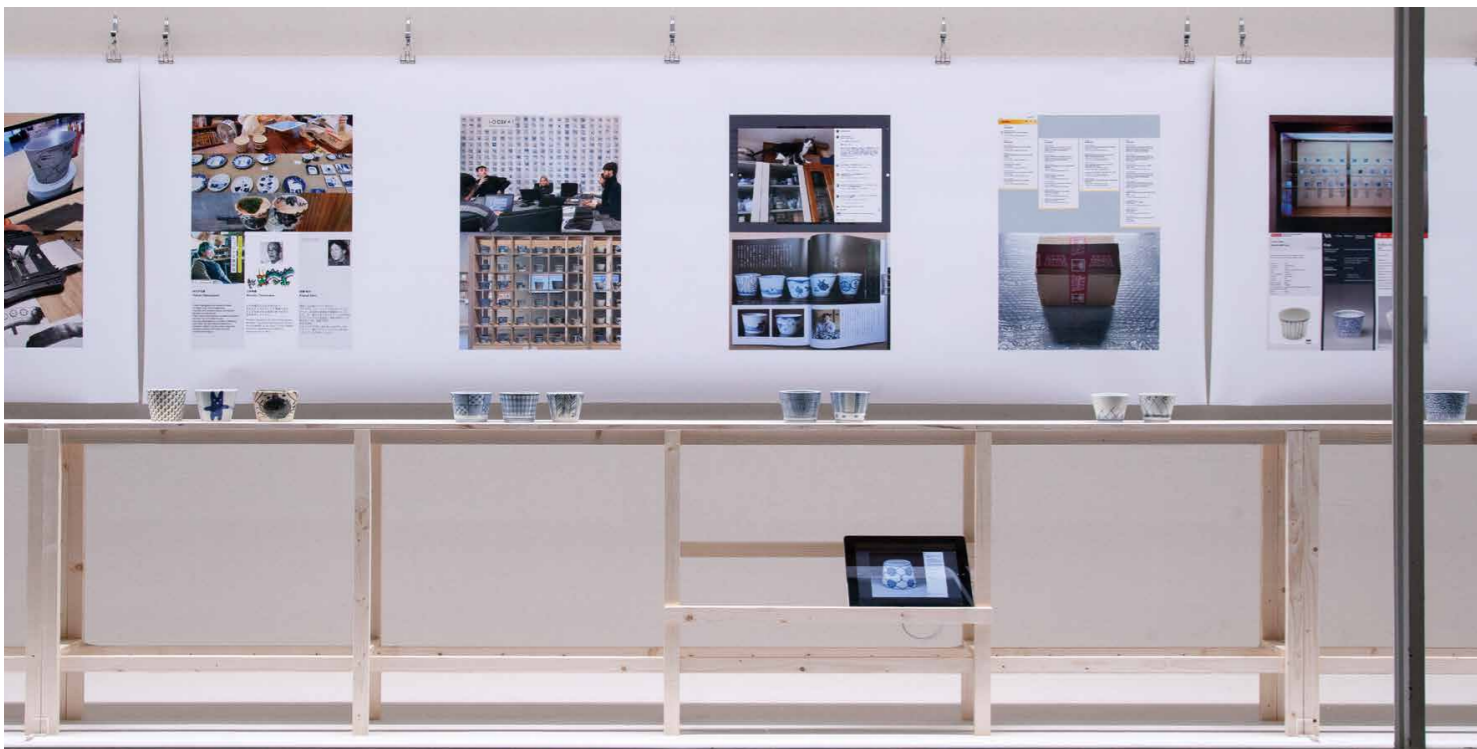
23 蕎麦猪口というコップになる

私たちが「なる」と言うとき、それは物事の未来についてではなく、その可能な変容のことを言っている。例えば、ドゥルーズは人間の「動物化」を理論化することで、逆説的に「子供になる」ことを理論化した。ここでは、蕎麦猪口という「コップになる」ことを考察し、廃棄物や公害の原因であるコップが、蕎麦猪口という鉱物個体としてのモデルにしたがって、その個体化と使用に注意を払いながら変容していくことを考える。人気マンガの広告蕎麦猪口は、コップの世界における蕎麦猪口の位置を示している。

24 アーティストのコップ

このコラムの冒頭で、蕎麦猪口は劇の俳優であると述べた。しかし、今や彼は単なるコップでもある。多くの作品に登場するコップは、人間関係を構築する役者であり、人類が作った最も古いもののひとつである。ジョー・コッカー、デベッシュ・モード、シャンタル・アケルマン、フランス・アレイス、エドゥアルド・アロヨ、ジル・エロー、そしてロラン・バルト、クロード・レヴィ＝ストロース、ジャック・ラカン、ミシェル・フーコー、ルイ・アルチュセールといった大人物と共演している。

j-1



j-1

17 購入した三つの蕎麦猪口の由来

蕎麦猪口が何たるかを知っていれば、店内のあらゆるものの中から蕎麦猪口を見つけることができる。2023年の滞在では100点以上を購入した。インターネットを使えば、特定の作家を探し、その作家がどのような仕事をしているのかを知ることができる。ここでは、岐阜県にゆかりある蕎麦猪口の実際の購入例を3つ紹介する。

18 辞書.jp

コレクションの対象であり主題である蕎麦猪口存在は、店頭や博物館よりも、むしろ本屋で目に留まるようになる。一連の書籍はまさに辞書であり、sobachoko.jpという、考えうるかぎり最も直接的なウェブアドレスでは、比類ないコレクションに出会える。このサイトの管理者、岸間健食によれば、それは「博物館」である。江戸時代の蕎麦猪口975点の写真と名前が掲載されており、モチーフは9種類に分類されている。デジタル技術により正確に分類でき、変種が識別できるようになっている。

19 インフルエンサー

デジタルの最も重要な側面のひとつは、投稿、共有、遊び、取引にネットワークを利用することである。蕎麦猪口の場合もまた、インフルエンサーが重要な役割を果たす。たとえば、インスタグラムでは、kiyoshi.4614、muzinamon0205、echizenyaheitaらが知られる。越前屋平太は、蕎麦猪口界における古美術商というよりコレクターであり、平均して4日に一度はあらゆる角度から蕎麦猪口の投稿を行う。想像上の印象や物語の余談を綴り、しばしばユーモアや嘲笑の印として「笑」を添える。

20 旅の軌跡

江戸時代の有田焼の芦の文様をもつ2つの蕎麦猪口をオークションサイトで購入。2023年5月19日から22日まで、東京、香港、フランクフルト、ライブツィヒ、パリの27つの寄港地を経る。入札は毎晩行われる。手ごろな値段で、古くてもキズのない、かわいらしい蕎麦猪口を手に入ると、この容器に入っているもの、つまり旅のデータによって満足感が倍増する。釉薬のかかったコバルトブルーの磁器は歴史に名を残し、大陸から大陸へと旅し、時には海の底に沈んでいった。



22 「モバイルの遷在性」より展示作品

j-1



石橋友也

ISHIBASHI Tomoya

1990年生。2023年IAMAS 博士後期課程入学。大学では生物学を学ぶ。現代的な科学やテクノロジーの視点から、品種改良種や人工知能、文字などの自然と人為の境界に位置する対象の性質、構造、来歴に迫る実践を行う。2012年より早稲田大学生命美学プラットフォーム“metaPhorest”に所属。現在は生物学にまつわる芸術の研究と制作を行う。主な受賞に文化庁メディア芸術祭優秀賞(2021)、第25回岡本太郎現代芸術賞入選(2022)など。人類が1700年かけて愛玩用に造形してきた金魚を祖先であるフナに戻す、都市や森のランドスケープのなかに見出される言語の幾何学的パターンを人工知能によって再認する、川で拾得した廃棄物から制作した顕微鏡を用いて川の有機的環境を覗き見る、石橋のこれらのアプローチは、わたしたち人間とそれを取り巻く環境との関係や、わたしたちが世界を生きる手段である技術について、思考を再構築するよう挑発する。品種改良によって作られた種は自然の一部たり得るのか、人工物と自然物のあいだに本質的な差異はあるのか、〈ものを作る〉とはいかなる営為なのかを問う。

Born in 1990. Entered the IAMAS doctoral program in 2023. Studied biology at university. From the perspective of contemporary science and technology, his practices close in on the nature, structure, and history of objects located at the boundary between nature and artifice, such as improved breeding varieties, artificial intelligence, and writing. Since 2012, he has been a member of “metaPhorest,” a platform for bioaesthetics at Waseda University. Currently, he is engaged in research and production of art related to biology. Major awards include the Excellence Prize at the Japan Media Arts Festival (2021) and the 25th Taro Okamoto Award for Contemporary Art (2022).

His works include the challenge of restoring goldfish, which mankind has formed into cherished pets over the past 1,700 years, to their ancestral form of crucian carp; the idea of using artificial intelligence to recognize the geometric patterns of language found in urban and forest landscapes; and the action of using a microscope created from waste found in a river to peer into the organic environment of the river. Ishibashi's approach provokes us to restructure our relationship with our environment and the technology that allows us to live in the world. He asks whether seeds created through selective breeding can be part of nature, whether there is any essential difference between man-made and natural objects, and what kind of activity “making things” is.





i-2

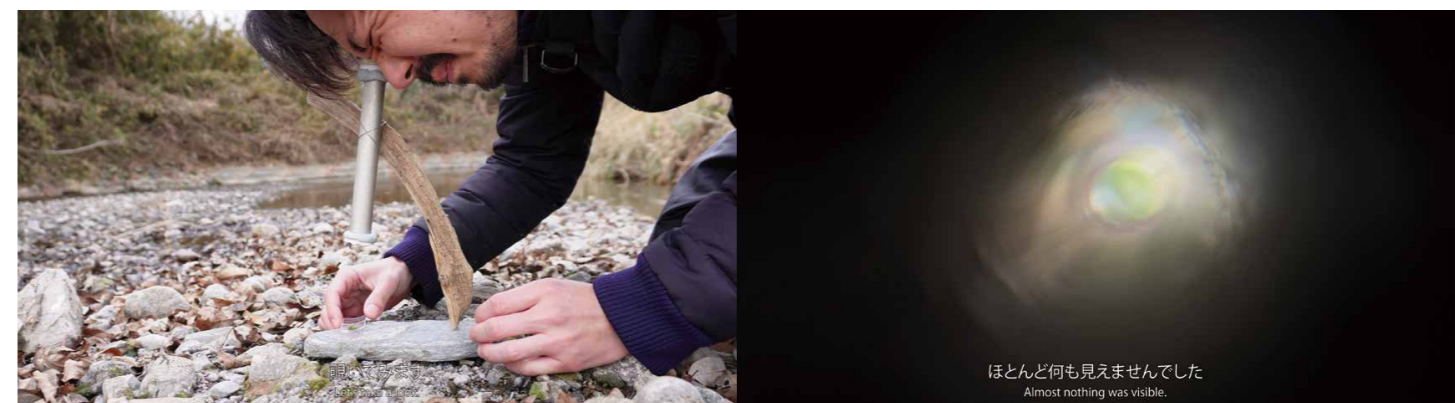
Self-reference microscope

本作は川で拾いとることのできる素材で顕微鏡を自作し、その顕微鏡で川の水を覗く自己言及的な (Self-referential) プロジェクトである。素材となるのは自然物と人工的な廃棄物 (ゴミ) である。こうした素材から試行錯誤を重ねて制作される顕微鏡装置が映し出すのは、現代人がその機能として享受する精緻なマイクロ世界の像とは似ても似つかない「不確かな画像」である。

このプロジェクトは、現代におけるエコロジーをめぐる議論と、その背後にある技術を通じた世界認識の議論の交差点に位置している。「自然」と呼んできたものが今日見直しを迫られるなか、自然哲学者のティモシー・モートンは、人為の入り混じる環境をありのままに捉える環境観として「ダーク・エコロジー」を提唱した。ポスト現象学には、技術が人間の世界の知覚や行為そのものを形作ってきたという考えがある。顕微鏡を含む光学装置は、文明の歴史において長いあいだ人類の欲望であった。ガリレオが実用的な望遠鏡を発明し、ロバート・フックが2枚のレンズを用いる複式顕微鏡を発明して以来、こうした装置はわたしたちの世界そのものを構成してきたのである。

本作では、原始的な仕組みの一つである「水レンズ」や川で拾ったレンズを用いて顕微鏡を自作する作家の行為を通じて、技術と人類の関係を再考する。

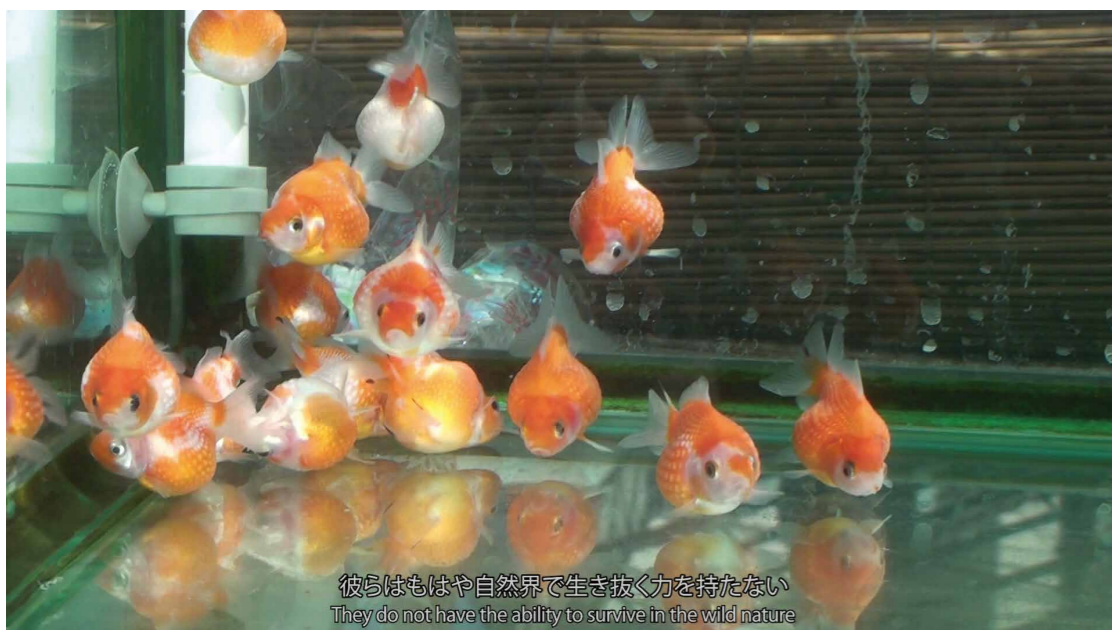
助成：令和6年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業



i-2

金魚解放運動

金魚の祖先は野生のフナであり、1700年間の品種改良を通じて多種多様な品種が生み出されてきたという。鑑賞と愛玩を目的にデザインされた金魚たちは、その姿形から自然環境下で生き抜く力を持たない。本作は、金魚を逆方向に品種改良し直すことによって、祖先のフナのかたちへと戻す試みである。生命の操作にまつわる欲望や美意識、あるいは人類と他生物の相互作用や共進化についての問題を孕む本作は、先端の遺伝子組み換えを持ち出すまでもなく、人間による自然への関与を人工的とみなすのか、それとも生命の大きな流れにおける文化=耕作とみなすのかを問いかけようとする。本作は、生物学の修士研究として行った金魚とフナの関係性に基づく研究に基づく。作品では、数世代で金魚の特徴を失ってフナの姿に戻っていく金魚の姿が簡潔にまとめられているが、その実践には5年以上の歳月が費やされている。進化とは生命の技術的な営為であり、そこに介入する人間の営為もまた進化の流れに刻まれる。人間によって歪められた生命の流れを可視化するとともに、逆方向に介入するというパフォーマンスを通じて、その業の深さを相対化している。



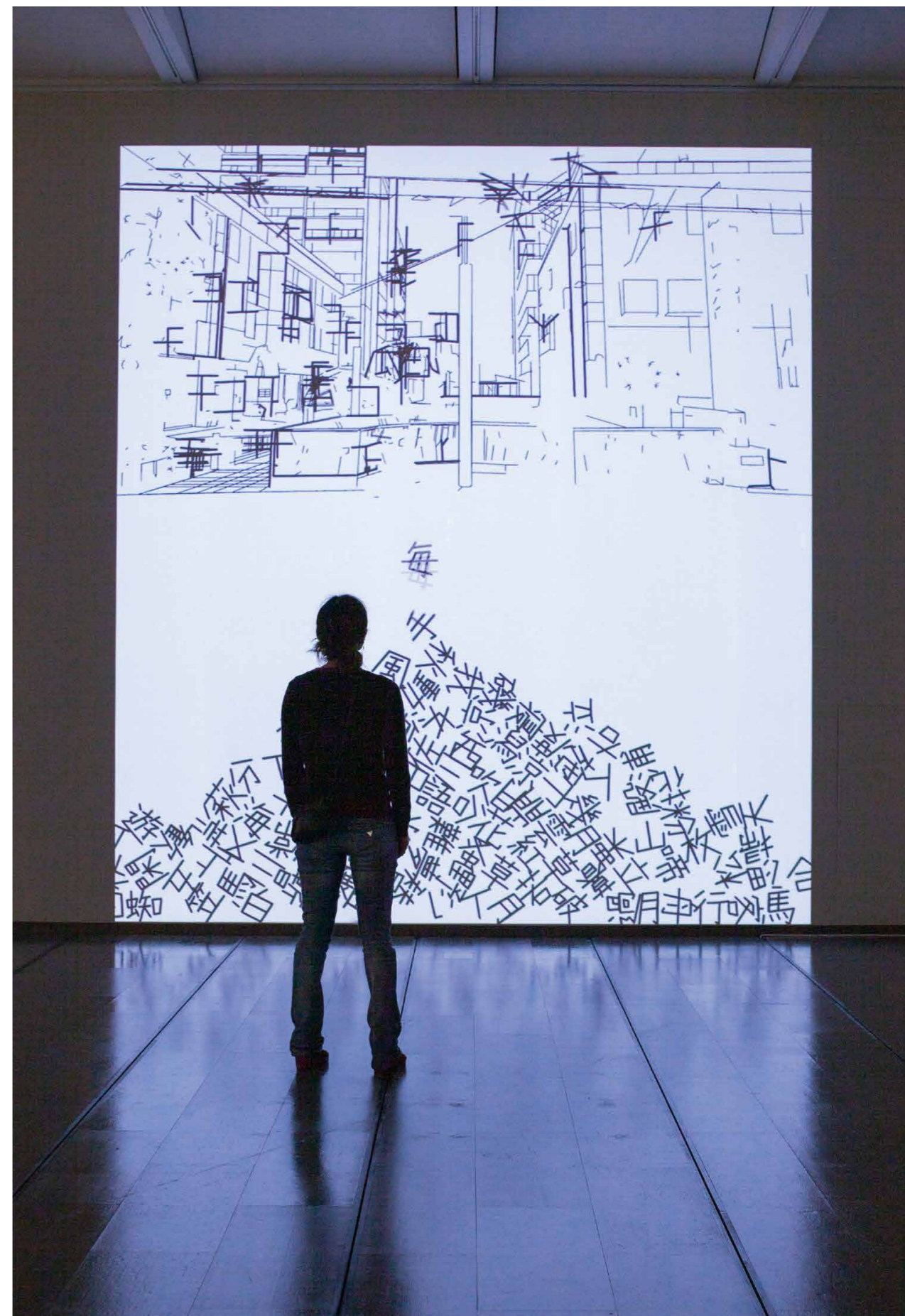
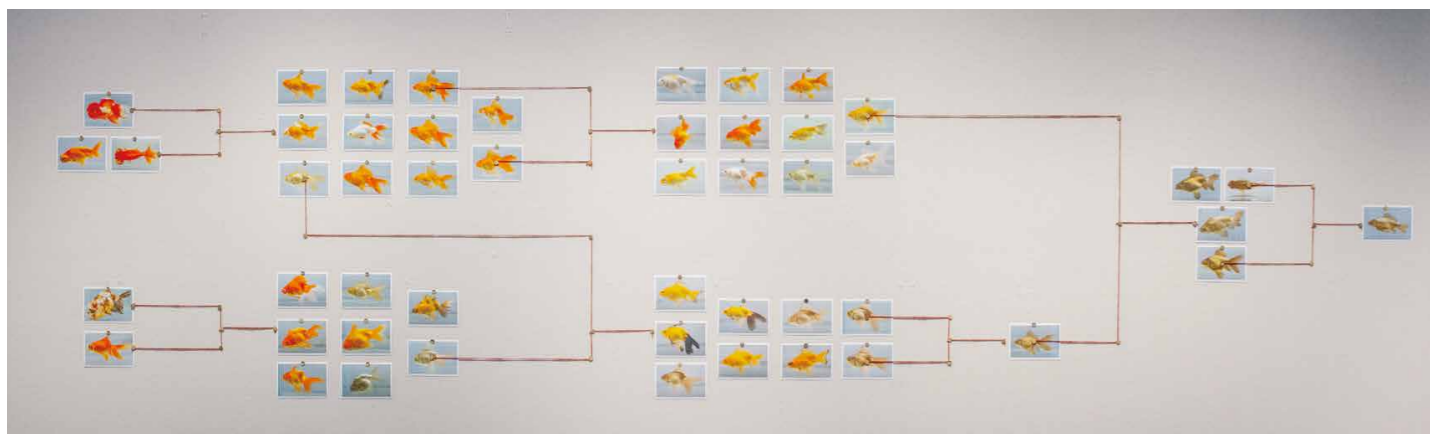
彼らはもはや自然界で生き抜く力を持たない
They do not have the ability to survive in the wild nature

1st Generation

5th Generation



四世代を経て、色彩や出目、大きな頭部が消失した
After four generations, the bright body color, large eyes, and large head disappeared



バベルのランドスケープ

文字言語は、思考を錬成し、社会生活を成立させ、書かれたものとしての記憶を集積し、人類の文明を根底で支えてきた。人類が発明した文字は、文明ごとに大変異なっており、それらは複雑に分歧しながら、今日の文字となってきた。2006年に認知科学者のチャンギーーらは、風景の中に現れる幾何学的パターンの分布とあらゆる言語の文字の中に現れるパターンの分布が一致することを示した。この研究結果は、人類が身につけた自然を観察する能力に適応するように、文字の形が収斂進化していった可能性があることを意味する。高度に発達した言語は技術的発明の最たるものであるとみなすことができるが、実はそのすべてが人類を取り巻く世界の焼き直しなのかもしれない。

florian gadenne + miki okubo

florian gadenne + miki okubo

美術家のフロリアン・ガデン（1987年生）と、美学・芸術学を研究領域とする IAMAS 准教授の大久保美紀（1984年生）によるユニット。生態系の複雑性に着目し、エコロジー問題に対峙する表現活動が続ける。第 10 回 500m 美術館賞グランプリ賞（2023）、清流の国ぎふ芸術祭 Art Award in the CUBE 2023 入選。ガデンは第 27 回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞（2024）、大久保は西枝財団 2024 年度「瑞雲庵における若手創造者支援プログラム」に採択され、展覧会「遍在、不死、メタモルフォーゼ」を企画。

ガデンと大久保は、自身を取り巻く世界との関係を新しく結び直すための糸口を模索する。非人間存在との関係を再考するブリュノ・ラトゥール、技術の人間固有性から脱却するエマヌエーレ・コッチャ、木々を見る慣習的な視点を覆すフランシス・アレを参照しながら、エコロジー問題への対峙を軸に、日常を新しく生きる芸術的アプローチを追究する。その試みは、生態系の自生に関する実験的な生物彫刻、生の関係性としての「食」をめぐる表現、生態系における複雑な関係性を多角的に再構成した絵画作品として展開されてきた。本展では木々の世界をめぐるインスタレーションに取り組み、わたしたちと非人間存在の「生きるための技術」を思考する。

The unit consists of artist Florian Gadenne (born in 1987) and IAMAS associate professor OKUBO Miki (born in 1984), whose research field is aesthetics and art. They focus on the complexity of ecosystems and continue their expressive activities to confront ecological issues. They won the Grand Prix Prize at the 10th 500m Museum Award (2023) and were selected for the Art Award in the CUBE 2023 at the Gifu Land of Clear Waters Art Festival. Gadenne won the 27th Taro Okamoto Award for Contemporary Art Special Prize (2024). Okubo was selected for the Nishieda Foundation's 2024 "Young Curator Support Program at Zuiin-An" and organized the exhibition "Omnipresence, Immortality, Metamorphosis."

Gadenne and Okubo search for clues to reconnect with the world around them in a new way. Bruno Latour, who rethinks the relationship with non-human existences, Emanuele Coccia, who breaks away from the human-specificity of techniques, and Francis Hallé, who subverts the conventional view of trees; are referenced whilst they pursue an artistic approach to living an everyday life anew, centered on a confrontation with ecological issues. Their attempts have been developed as experimental bio-sculptures on the autogenesis of ecosystems, expressions on "food" as a relation to life, and paintings that reconstruct the complex relationships in ecosystems from multiple perspectives. In this exhibition, they will create an installation about the world of trees and consider the "techniques for living" between us and non-human beings.



f-1

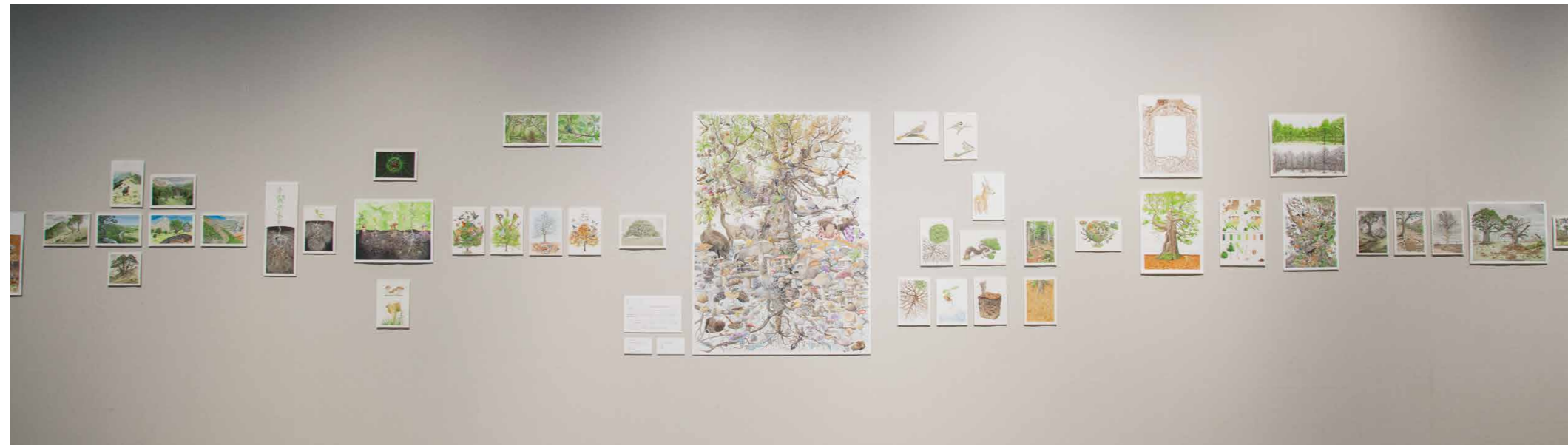
L'Arbre-Monde

《L'Arbre-Monde》は、下記の4つのパートからなり、エコロジーの問いを異なる視点から考察する。

- ① 《Trogne-arbre habitat》
- ② 《Le Chêne Monde》
- ③ [L'Arbre-Monde] のためのイラストレーション
- ④ 《Gland Monde》

《Trogne-arbre habitat》と《Le Chêne Monde》は、ともに、大きな樹木を主題とした絵画作品である。樹木学者や生物学者の協力を得て精緻な調査に基づいて制作されたそれらの作品では、生態系の複雑さと多様性がテーマとなっている。こうした樹木は「ホロピオント」(=ある宿主を基軸とした多種の集合体)である。大きな樹木に共棲する多種多様な生物たちはそれぞれが樹木と関係を結んでいると同時に、樹木を分け合っているほかの生とも複雑な関係を結んでいる。

《Gland Monde》は、《Le Chêne Monde》および [L'Arbre-Monde] のためのイラストレーションに着想を得ている。ある対象を深く知ることの意味を問い、対象への共感を模索する。そしてそうした経験を共に分かち合うことを呼びかける。



f-1



f-1 ③



f-1 ④



f-1 ②

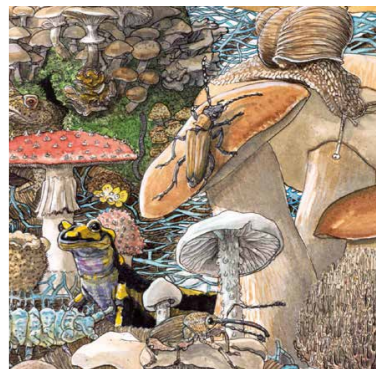
Le Chêne Monde

《Le Chêne Monde》(オークの世界)は、一本の樹木が抱え得る複雑な生態系が繊細なテクニックで描き込まれた作品である。

「オーク」[仏: chêne]はカシ・カシワ・ナラなどを含むコナラ属の総称である。フランス・マルタンによれば、オークは樹木の中でも最も多くの種を育むそうだ。木の枝には虫や鳥や地衣類、地面には異なる動植物、根の部分には菌類が鬱蒼とする様子、さらには四季の変化すら感じ取ることができる。共生、対立、寄生、捕食・被食という生物種間の複雑な関係性とエネルギーのサイクルを可視化することによって、生とは「ネットワーク」であることを明らかにする。

2019年に始まった《Le Chêne Monde》をめぐる研究は、作品《Le Chêne Monde》(2022)の完成後もガデンとマルタンによって継続的に続けられ、[L'Arbre-Monde] (Belin, 2024)として結実した。本展では本書の挿絵として制作された64枚のドローイングも展示する。

協力: Francis Martin (フランス国立農業・食品・環境研究所 [INRAE] 名誉研究部長)





f-1 ①



f-1 ①

Trogné — arbre habitat

「剪定」とは、枝を切ることで人間が樹木の成長に介入することである。形を整え風通しを良くする・風害や病気から守る・果樹の生産を安定させるなど、さまざまな目的があるが、木材を得るために計画的に行われる剪定もある。人類に木材を与えるある種の樹木は、定期的に枝が切られることで幹の部分が空洞化し、驚くほど多くの種が共棲する「家」となる。動物だけでなく、樹皮には地衣類や苔植物が、根には菌類やバクテリアが無数に生息する。ギリシャ語のὄλος (すべて) と βίος (生命) を語源とする「ホロビオント」は、宿主とその内部や周囲に生息する他の多くの種の集合体である。腸内細菌叢から、大きな樹木まで、こうした集合体の一形態とみなされる。あらゆる生きものの境界線は多孔質で、「個」は「他」によって成り立っている。定期的な剪定はある種の「技術知」である。繰り返し木材を得るために、樹木の生そのものを傷つけないよう長い年月をかけて培われた共生の技といえる。

協力：Alexandre Boissinot (Deux-Sèvres Nature Environnementが管理するBocage des Antonins地域自然保護区の学芸員)



f-1 ④

Gland Monde

ドングリは、広くはブナ科の樹木の果実、狭くはコナラ科の樹木の果実と定義される。大きなドングリの木を描いた《Le Chêne Monde》とその木の果実の多様性を浮き彫りにした『L'Arbre-Monde』のためのイラストレーションを元に制作された。拾い集めたドングリを描く盛口満の行為^{*1}や、木々の構造を理解するためには見るだけではなく描かなければならないという樹木学者フランシス・アレの言葉^{*2}に触発され、都市や森で採取した木の果実を型取り、施釉焼成し、磁土製のドングリを得た。ギリシャ語で模倣を意味する「ミメシス」[μίμησις]は、人間が身体動作を通じて対象を「うつす」行為であり、近代より前の時代には芸術行為の本質であった。手を動かして対象を写しとることは事物の理解や対象への共感に深い関係がある。小さな木の果実の一つひとつは樹木の生命の「技術」の現れである。植物の生のなかにある技術は、動物や人類のそれとは異なるが、みな生きるための技術を持っている。

*1 盛口満「ひろった・あつめた ぼくのドングリ図鑑」岩崎書店 (2010)

*2 Francis Hallé, Entretien avec Emanuele Coccia (2019), « Une vie à dessiner les arbres », Nous les Arbres, Fondation Cartier pour l'art contemporain.

西脇直毅

NISHIWAKI Naoki

1977年生。2007年 IAMAS 修了。ネコや縄目の文様が無限に増殖し画面を埋め尽くすような、精緻な作品に取り組む。国際芸術コンペティション「アートオリンピア」審査員特別賞（建畠哲）受賞（2015）。個展に「超絶のボールペン画無数のネコたち」（天満屋岡山本店・福山店、2020）、「意気猫々」（ギャラリー宮脇、京都、2021）、吉村大星との二人展に「ミクロの猫と巨大な猫」（瀬戸内市立美術館、2020）など。国際交流基金海外巡回展「超絶技巧の日本」出品中（2018-）。

西脇直毅の絵画世界では、微小なネコが増殖し、数えきれないほど集まって流れを成す。ネコは異なる動物と出会い、あるときは渦を巻き青海波のような文様と有機的に接続しながら、紙面を埋め尽くす。こうしたアクションは、人類の伝統的な表現としての「文様」の生成になぞらえることができる。彼の表す文様は特定の意味を帯びた単なる装飾ではない。2024年から新しく取り組む《刺青の女》シリーズでは、西脇は使い慣れたボールペンのグリップを離れ、液晶タブレットとペンを用いてデジタルの皮膚に文様をほどこす。

「文身」（イレズミ）が身体を世界から聖別するものであったように、現代のテクノロジーを通じて描かれる西脇の文様もまた、世界の裂け目を垣間見せる「わざ」である。

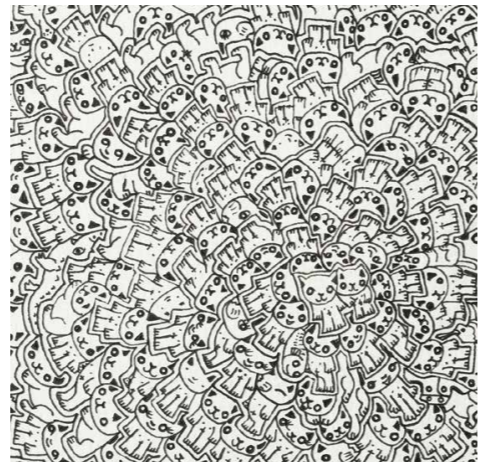
Born in 1977. Graduated from IAMAS in 2007. He creates exquisite works in which cats and rope patterns seem to proliferate endlessly and fill a screen. He won the Special Jury Prize (Akira Tatehata) at the international art competition "Art Olympia" (2015). Solo exhibitions include "Superlative Ballpoint Pen Drawings of Countless Cats" (Tenmaya, Okayama and Fukuyama, 2020), "Iki Byobyō" (Galerie Miyawaki, Kyoto, 2021), and a two-person exhibition with Daisei Yoshimura, "Micro Cats and Giant Cats" (Setouchi City Museum of Art, 2020). He is currently exhibiting in the Japan Foundation Overseas Touring Exhibition "The Superlative Artistry of Japan" (2018-).

In Nishiwaki Naoki's painting world, microscopic cats proliferate and countless of them come together to form a stream. The cats meet different animals, at times whirling around and organically connecting with patterns like blue ocean waves, completely covering the surface of the paper. These actions can be likened to the creation of "patterns" as a traditional expression of humankind. His patterns are not simple decorations. In the "Tattooed Woman" series, which Nishiwaki has begun endeavoring on in 2024, he distances himself from the familiar grip of his ballpoint pen and uses an LCD tablet and pen to apply patterns to her digital skin. Just as the "bunshin" (tattooed body) was a way of consecrating the body from the world, Nishiwaki's patterns, rendered through modern technology, are a "technique" that offers a glimpse into the cracks in the world.

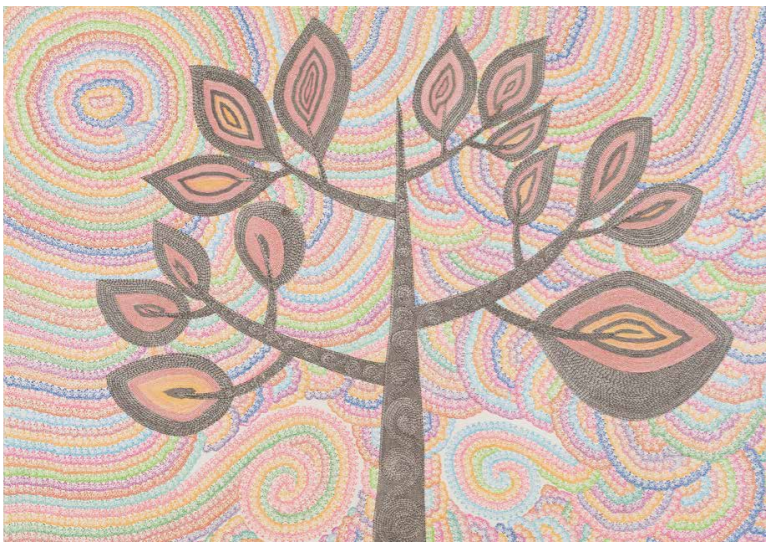




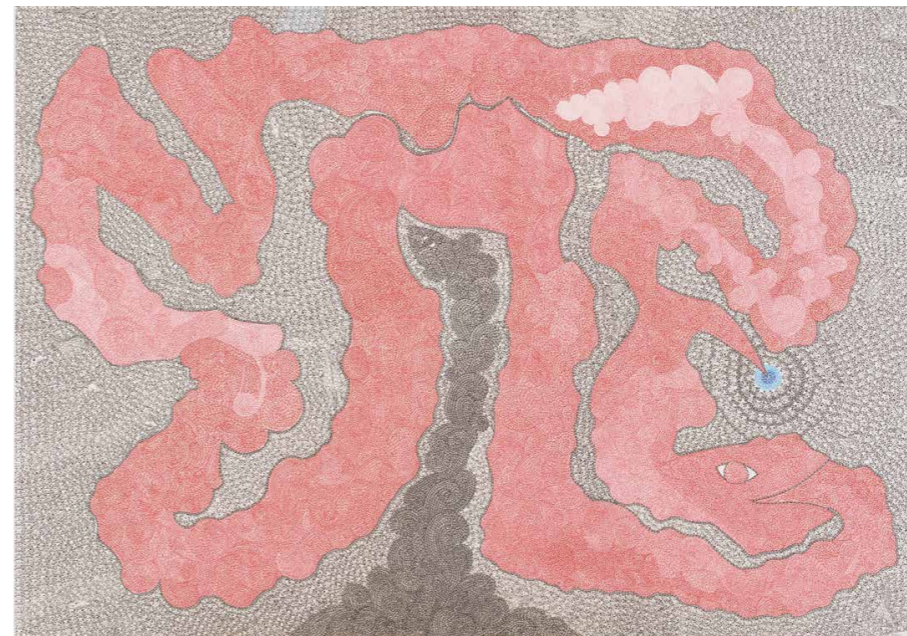
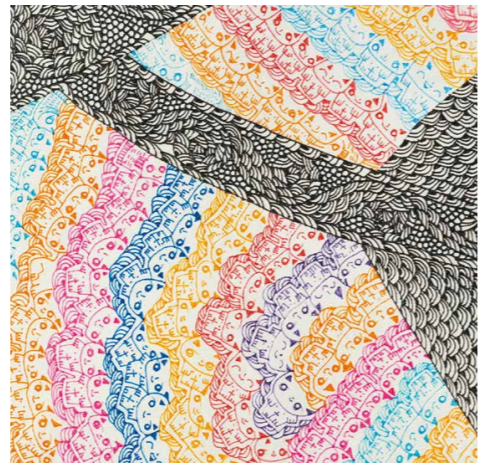
n-6



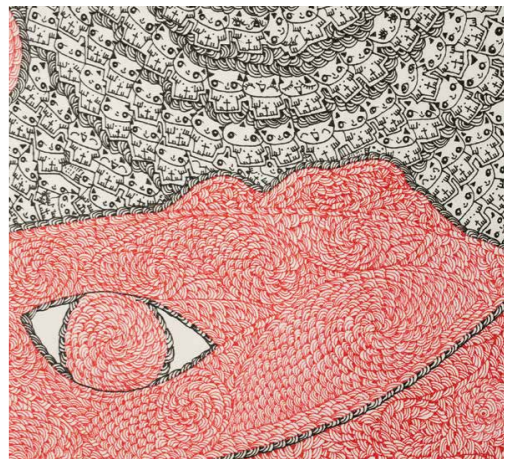
n-7



n-9

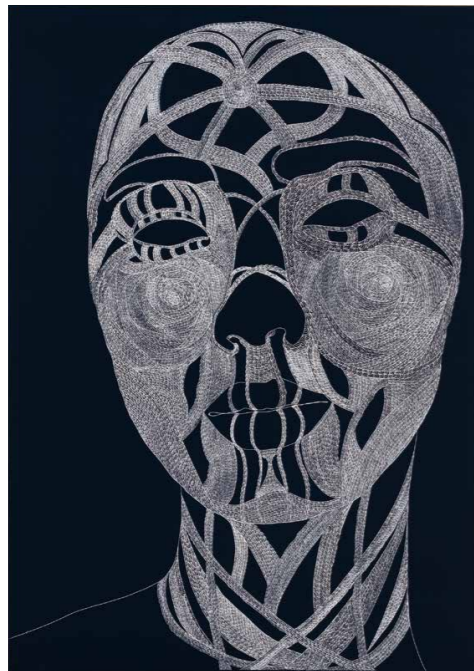
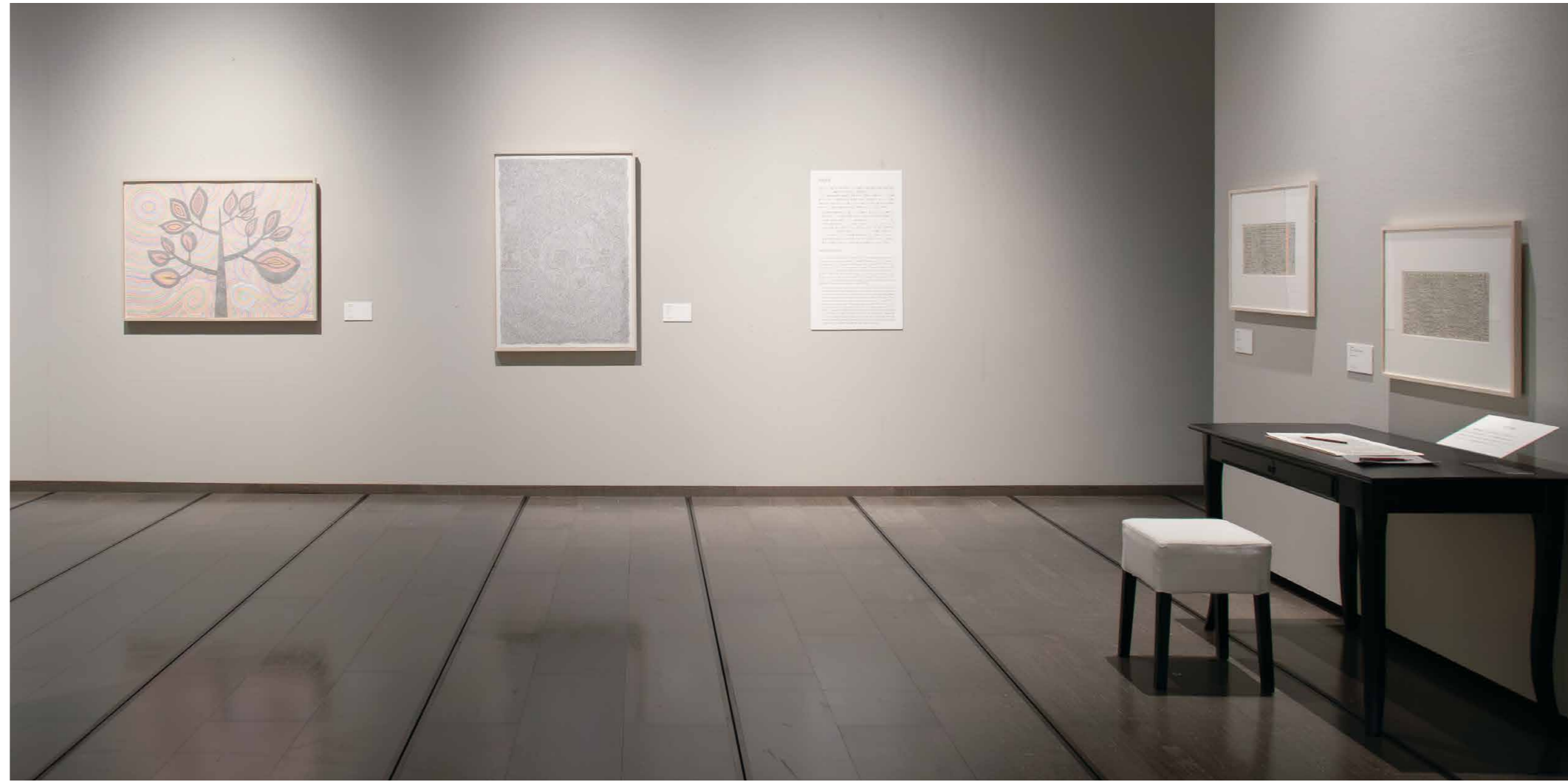


n-8

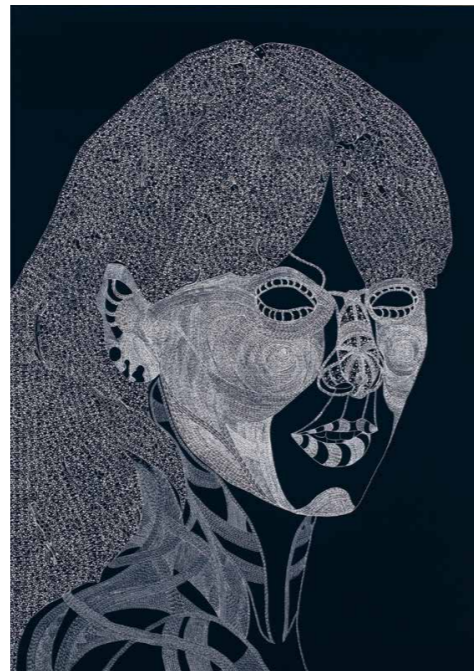




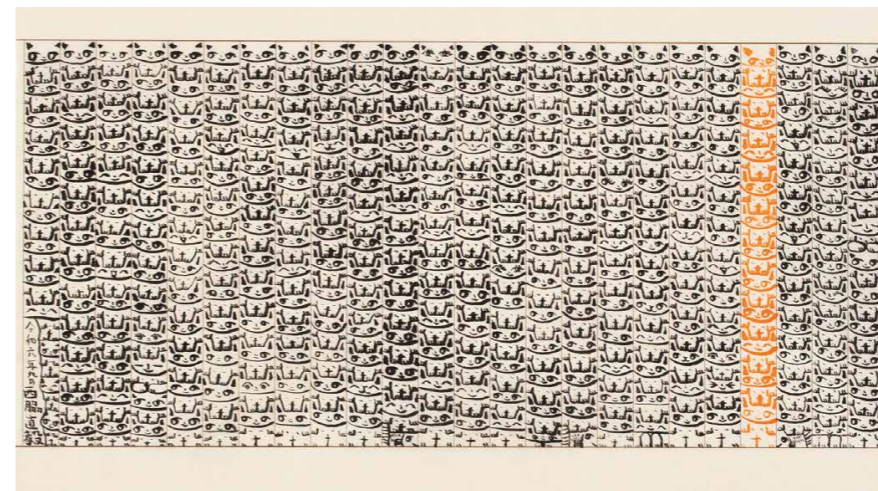
n-4



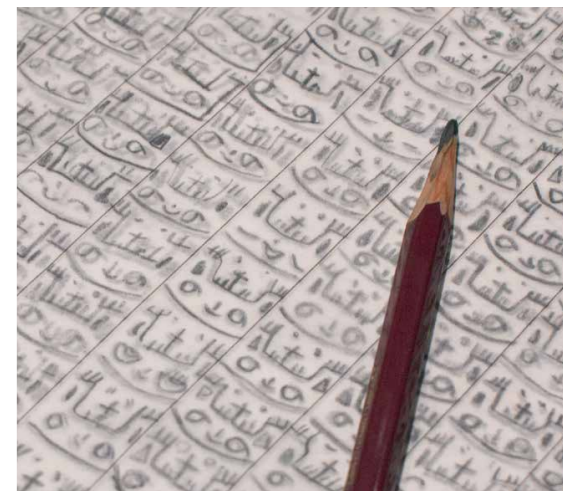
n-2



n-3



n-11



ネコは描かれると魂みたいなのがネコの絵に入ってゆくのだと想像します。わたしの絵には1枚につき数千匹のネコが描かれていますが、すべてのネコに魂が入っているのだと思います。一匹入魂です。ネコには、ネコの意識の集合体みたいなものと仮定してみます。私は、その意識の集合体みたいなものに繋がって、ネコを描いて魂を吹き込んでいるのだと想像します。そのネコ意識の集合体への繋がるためのコードは、ネコを実際に描くことだと実感します。ネコの意識に繋がっている時、ネコは日本語を話すこともあるような気がします。例えば「きれいに描いてね」とか「可愛く描いてね」とかです。ときには、励ましてもらうこともあるように思います。実際日本語を喋るネコはいませんが、ネコの意識の集合体へ繋がることは、わたしが描いている最中に起こっているのではないかと感じます。以上のことがわたしがネコを描いている最中に起こっているのではと思っています。

(個展「意気猫々」(ギャラリー宮脇、2021)に寄せた作者の言葉より引用)

クワクボリョウタ

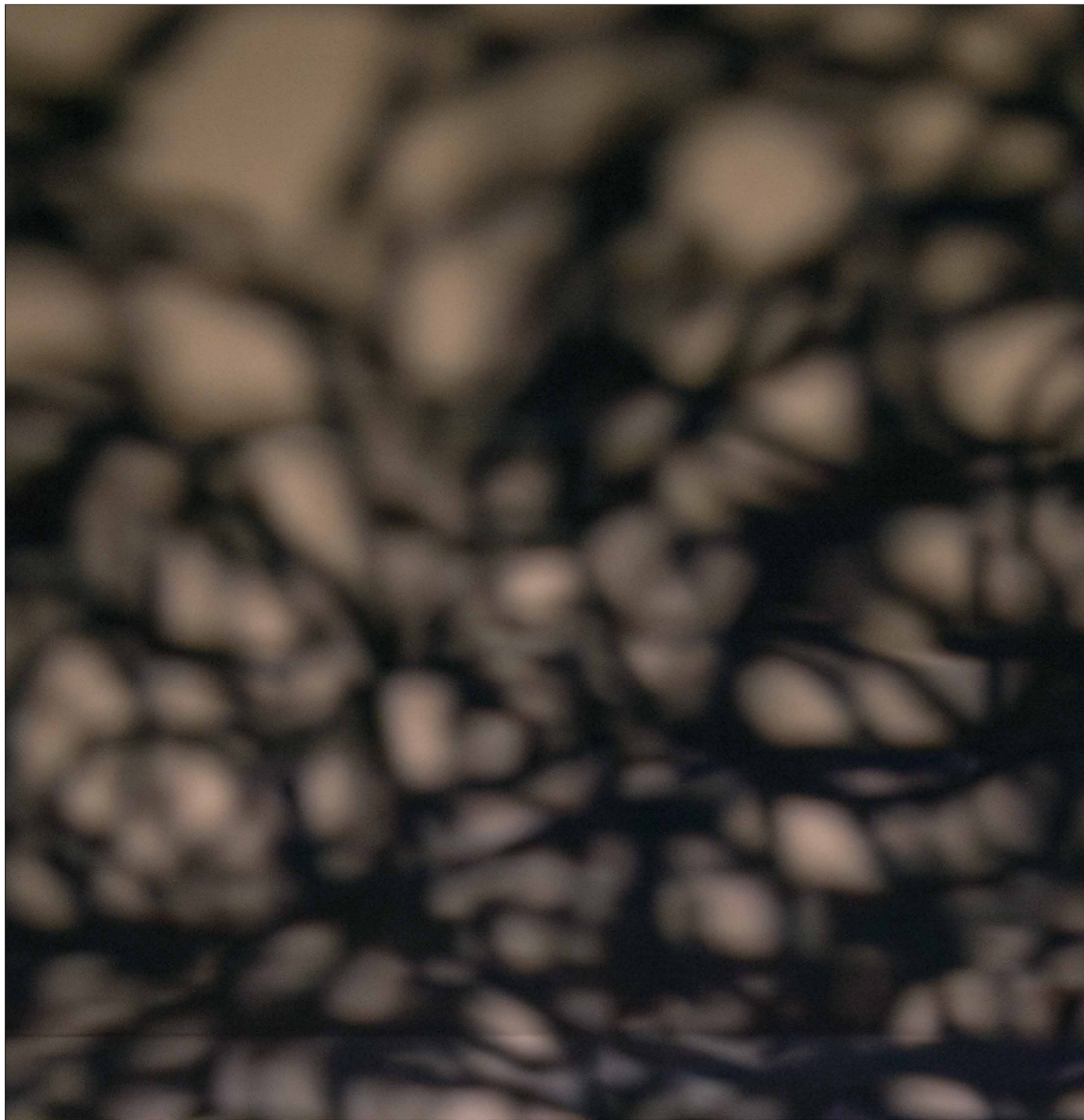
KUWAKUBO Ryota

1971年生、IAMAS 教授。電子回路を素材とした「デバイス・アート」の代表作に《ビットマン》(1998)、《PLX》(2000)、《ニコダマ》(2010) などがある。2010年《10番目の感傷(点・線・面)》で第14回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。光と影による内的な体験を促すインスタレーションを制作している。「パーフェクトロン」として「デザインあ展」(2018)の展示構成などを手がける。2010年の《10番目の感傷(点・線・面)》に端を発する光と影による表現は、「LOST」シリーズとして、これまで世界中で発表されてきた。日用品と鉄道模型によって構成されるこのシリーズは、作家による特定のアイデアに依拠しながら、その作品群は唯一の形にとどまらず、無数のヴァリエーション【異形】へと発展する。核となるアイデアを基に作られた作品は、とりまく環境そのものをダイナミックに変化させ、それ自身もまた変容することをやめない。展示会のエコロジーとは何か、作品を生態学的に探求するとはいかなることか。クワクボは、本展をこうした問いへの応答の契機と解釈し、ヴァリエーションの制作に挑む。

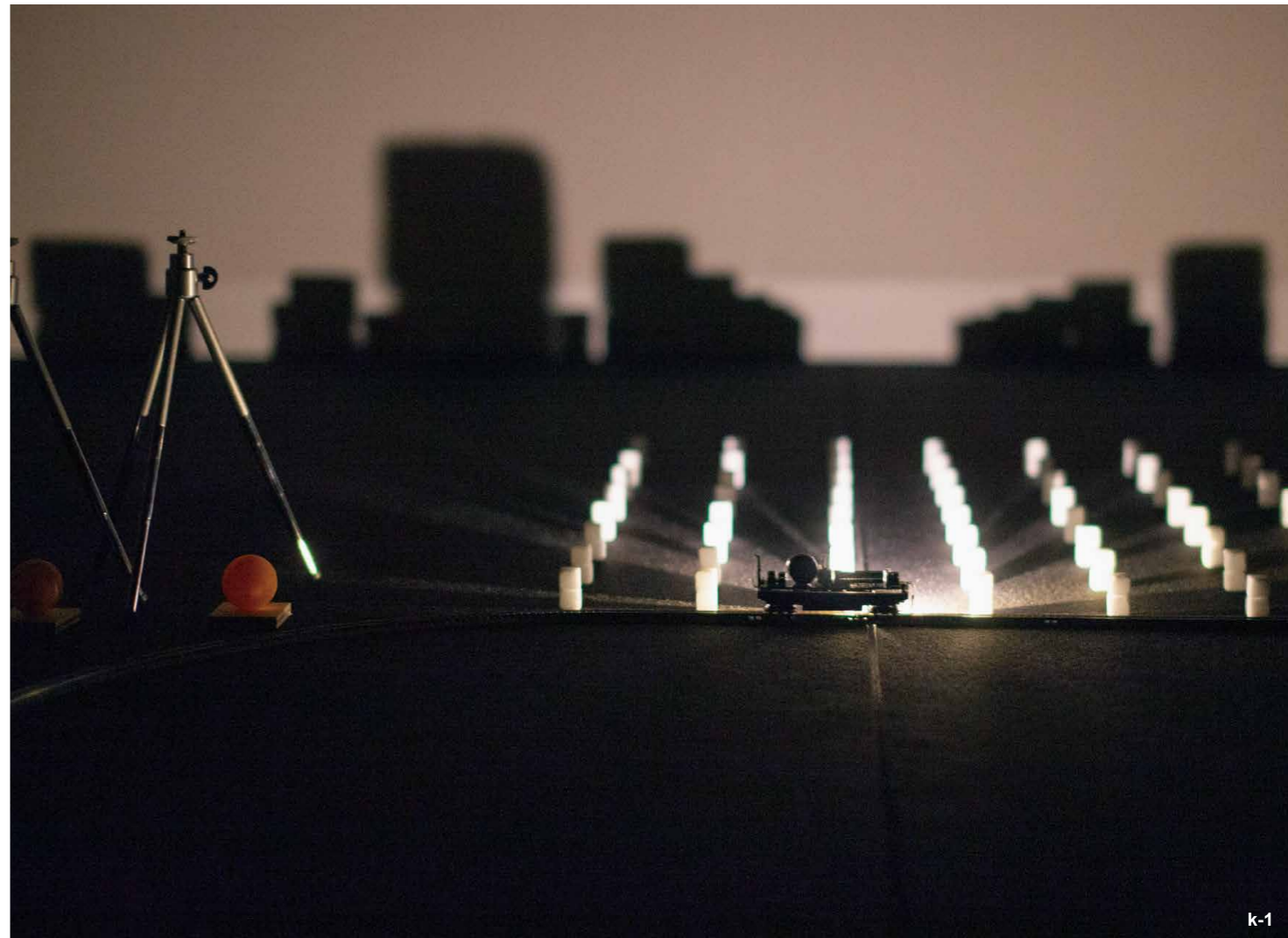
Born in 1971, Professor at IAMAS. His representative "device art" works using electronic circuits include "Bitman" (1998), "PLX" (2000), and "Nikodama" (2010). In 2010, he received the Excellence Award in the Art Division of the 14th Japan Media Arts Festival for "The Tenth Sentiment." He creates installations that encourage an internal experience through light and shadow. As a member of the art unit PERFEKTRON, he is involved in the exhibition composition of "Design Ah! Exhibition" (2018).

His expression using light and shadow, which began with "The Tenth Sentiment" in 2010, has been developed into the "LOST" series, which has been presented all over the world. The series, which is shaped by everyday objects and model trains, relies on specific ideas by the artist, but the works are not limited to a single form, and countless variants have been developed. The work created by a core idea dynamically changes the environment surrounding the work, which never ceases to transform itself. What is the ecology of the exhibition, and what does it mean to explore the work ecologically? Kuwakubo interprets this exhibition as an opportunity to respond to these questions and to create a variant.

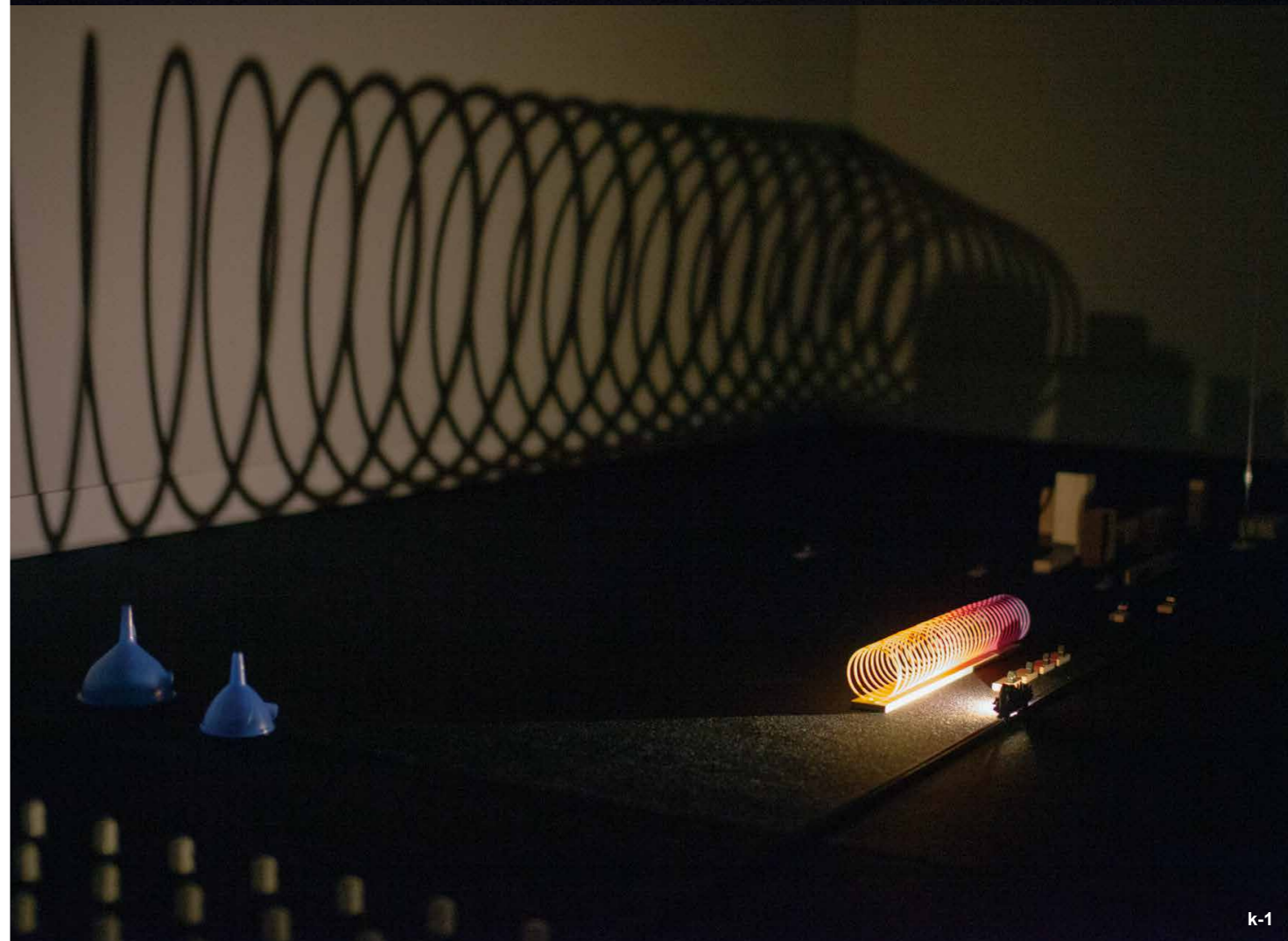




k-1



k-1



k-1

《LOST (Diversion)》は、《10番目の感傷 (点・線・面)》以来LOSTシリーズに取り組んできたクワクボが発見したヴァリエントの一つである。「Diversion」とはラテン語のdivertereに由来する。「流用・迂回」を表す語幹を持ち、「気晴らし・慰み」を含意する。これまでLOSTシリーズは、電車模型に伴われたLEDライトが進行方向の左側及び前方を照らすことで、ある種のノスタルジーを感じさせる車窓の風景の似姿あるいは異化されたリアリティを現前させてきたが、LOST (Diversion)において電車模型は逆走する。すなわち、進行方向の右側を照らし、自らが行き去った風景を照らしだす。「走馬灯」と表される高速での振り返りが前方向を照らす電車によって実現される。本作の核にあるのは作品の生態学（エコロジー）である。LOSTという技術的対象が作者といかに「共に生きるか」という問題は、われわれを宿主とする生物がわれわれにおいてさまざまに変化しながら生き続けてきた歴史にその答えを見出すことができるだろう。



「技術と芸術」の問いと「技術と芸術」の問い

10回目となるIAMAS ARTIST FILEでは、初めてテーマが先に設けられた。IAMASから提案されたテーマは、「技術から考えるエコロジー」である。これは「技術によって環境問題を打開する」意ではない。本展の真意は、より根源的な考えに焦点をあて、人間が自然や他の動物よりも上位にあるとする観念や、科学的知識の特権的地位に疑問を投げかけることである。この主旨をどのように展覧会として形にするかがが美術館の役割であり、本展の成否を分けると思われた。

本展のタイトルである「繭」は、思想家E. コッチャの『メタモルフォーゼの哲学』第II部の「繭はこういつてよければ個体によって製造された生まれた後の卵である」に依っている。しかしこれは、前章を読まなければ少々わかりにくいだろう。これに先立つ第I部を踏まえれば、つまり、卵は個体がつくった一つの世界であり、生まれた後の卵=繭は個体生命を包むと同時にそれによってまた生まれ変わることができるもの。あらゆる生物が生きる術としての技術をもっているのだ。

繭的な技術が、生きるために必要な技術であり、かつ、自らを変化させ、それ自体が環境であり、全ての個体が生来持っている術であるならば、芸術もまた、最も根源的で内的な技術といえる。すなわち、「芸術は、繭である」。こうして本展のテーゼが生まれ、展覧会が孵化し始めた。

本展では、西脇と石橋の2人の作家によるレジデンス方式での制作を含め、次のような多様な作品が展開された。

西脇直毅の絵画世界は小さな手描きの猫で埋め尽くされる。西脇は、猫を隣接させて描き、一匹の猫の輪郭線が次の猫の形に成る。まるで、どんなかたちにでも身体を添わせる本物の猫のように。あまりにも夥しいため機械的な制作に見えるが、決してコピー&ペーストでは得られない筆圧の痕跡や、ボールペンのインクの薄れによる渦巻き状のモアレのような濃淡が備わり、極めて身体的である。

「技術と芸術」の問いと「技術と芸術」の問い

《赤色のへびとネコ》では、近年の西脇の神話や東洋文化への関心が反映され、己の尾を啜えたウロボロスによって永劫回帰が示唆される。IAMAS在学中に雑誌に直接描かれた最初期の《刺青の男》が発展した《刺青の女》シリーズでは、女性雑誌のメイクモデルやテイラー・スウィフトの写真をベースに、タブレットを用いてその表皮に“刺青”を施している。作品としては、元写真は消され刺青だけが残る。デジタルタトゥーの暗喩とすることも可能であるが、むしろ蚕が糸を吐き続けるように、社会と自身の間、柔らかな境界と関係性を生成し続けようとする西脇の誠実さ、切実さを感じる。

現場で制作された入口自動ドアの《お米猫》は、米を原料とする画材を使用しており、作品名の由来でもある。一方で世界のすべての物質が原子という“粒”でできていることも想起させる。作家それぞれが描いた〇をCOCOONという文字に落とし込んだロゴに絡み合い、自動ドアの開閉に合わせ、柔らかな色彩が二重螺旋のように重なり合い、本展の象徴的存在となった。

石橋友也は、新作1点を含む3作を出品した。《パベルのランドスケープ》は、前バージョンではSNSに流れる言葉を素材にしたが、本展では岐阜にゆかりの松尾芭蕉『奥の細道』に取材し、「結びの地」である大垣の風景から、月、日、百、代などの漢字が現れる。世界各地の様々な古代文字が風景を構成する一定の点画に収斂していく学説を表現するには、象形文字を祖とする漢字と、世界最短の短詩型文学はふさわしい。《Self-refence Microscope》は、石橋の生家近くの荒川で拾った物で3種の顕微鏡を作り、その川の水を見る新作である。水滴の表面張力と拡大効果を利用した原始的な水レンズ、廃ガラスを磨いて小さなビーズ状の玉を造ったレーウエンフック式、対物と接眼のレンズを備えた複式である。光学技術により、人間が微生物を“発見”したことは、「不可視=存在しない」とは限られないことを証したが、本作はさらに、不可視の存在

「技術と芸術」の問いと「技術と芸術」の問い

は技術の波際で揺れ続けることを認識させる。

金魚の権利を守る虚構の動物愛護活動を想像させるタイトル《金魚解放運動》、人類が共通言語をもっていた時代に建造を試みた塔からみようとした風景（パベルのランドスケープ）、消費社会の象徴「コーク」の空き缶を顕微鏡に使うこと一、石橋の作品は、科学的であると同時に、批評性や文学性を帯びる。

初代学長坂根厳夫によって招かれ、様々な活動をIAMASで行ってきたジャン＝ルイ・ボワシエは、蕎麦猪口をメディアあるいはプレイヤーと捉え古今東西のさまざまな事象を考察する一種のレポートを発表した。そのなかで、「ハッシュタグ『#』が『井』とも読める」こと、「植物の笹の写真を人工知能が『竹』という字（の隷書体）に認識する」ことに注目しており、偶然にも、本展最若手と最年長である二人のメディアアーティストの関心が重なったように思える。

展示室は、florian gadenne+miki okuboの《Tronge-arbre habitat》を中央に配し、本展全体を樹下に収めるイメージで構成した。環境と共存する技術とは何かを問い、木が抱えうる生命を精密に視覚化した作だ。自然が絡み合い形成するネットワークは、複雑であればあるほど、レジリエンスをもつ。ドングリは、熊から菌類まで最も多様な生命に関係するうえ、その樹木種自体も檜、椎、樫など多様である。本展では6種類のドングリの木の葉を描き、その木の下で集めたドングリを陶で置き換えた。訪問者は、気に入ったドングリと同じ形のドングリを粘土で作り、交換して持ち帰ることができる。ドングリの細部を作るための道具は置かれておらず、自らの爪や指先で作るため、より時間がかかる。手の熱エネルギーが粘土を柔らかくし、感覚を働かせる時間を通して、情報と身体記憶が融合し、知識か行動か、人類か自然かといった二元論的な分離が解消されていく。

クワクポリョウタは、2010年、日用品の間を縫うように敷かれたNゲージの小さい鉄道模型の線路に一

「技術と芸術」の問いと「技術と芸術」の問い

両編成の電車が走り、そのライトが沿線にある物の影を壁に映す機構の作品として、最初の《10番目の感傷（点・線・面）》を発表したが、同手法の《LOST》シリーズは日用品が場によって変化する。一方、本展の《LOST(Diversion)》では、《10番目の感傷（点・線・面）》と同モチーフでありつつ、電車が逆進するという発想によって、作品生命や進化を考察する。Diversionは「進路変更」を意味し、例えば「ダイバート (diversion airport)」は当初の目的地以外の空港に着陸することである。暗闇の中で精妙なカーブを描きながらも、終着点が決まっているレールに導かれる作品には不思議なタイトルに思えるかもしれない。しかし、ライトが進行方向ではなく背後を照らすことによって、「電車が動いて沿線風景を映している」という状況が闇に沈み、光源が軌道や目的地をもたずに動いているようにも感じられる作となった。時間の長さ深さといった次元の広がり想起させるとともに、日用品が舞台装置になっていることや音に気が付けば、さらに個人的な体験の記憶も揺さぶる。環境との相互作用によって成立するインスタレーションが反復されるとき、物もしくは要素の同一性のいずれにもよって、作品の生命が維持されること、しかし「生きた」作品になるのは、儚く消える体験によってであることを感じさせる。

本展では、リサーチをもとに科学と芸術を関連づけることによって技術の概念を新たにし、あるいは、人間が世界と関わる根源的な技や術を問い、技術と記憶の変化をとおして世界との関係を再構築する作品が提示されたといえる。本展が繭となって、鑑賞者のなかの何かがもう一度生まれ直すことにつながれば本望である。芸術もまた、生に内在する一つの技術であり、だれの内にもあるものだから。

岐阜県美術館
鳥羽都子

作家によるギャラリートーク



ギャラリートークより抜粋構成。西脇直毅のみ個展「意気猫々」（ギャラリー宮脇、2021）に寄せたメッセージから構成。

ジャン＝ルイ・ボワシエ



本作は100名以上の協力を得て長期間続けてきたプロジェクトの報告です。情報過多の印象をむしろ楽しんでいただければ幸いです。ガラスケースで展示するにあたって、本の章立てのような展示を構想しました。全部で24章あります。

第1章「指で考える」という章を例にとって説明します。“digital”には、異なる意味があります。1つは「コンピューター、計算、数」、もう1つはフランス語で「指の、指に関する」、さらに指差しによって差し示すという意味もあります。パウル・クレーとアニ・アルパースという二人の作家にちなんで、彼らの線の表現をもとに私が制作した2つの蕎麦猪口を展示しています。

展示では蕎麦猪口が、演劇の役者・探検家・研究者として振る舞い、“degital”の世界でさまざまに問題を提起していきます。このように関係性を築くものとして蕎麦猪口を捉えると広がりが見えてくると思います。

石橋友也



「技術から思考するエコロジー」は、これまでの私の関心に統一的な視点をあたえるテーマだと感じています。

《Self Reference Mmicroscope》は、川で拾ったゴミや自然物で顕微鏡を作り、その川の水を見るという新作です。実は普段目にする川は、人間の手が入っていない箇所はないほど流路が大きく作り変えられています。顕微鏡は17世紀に発達した光学装置であり、そのテクノロジーを自分の体で作り直しています。

ライフワークの《金魚解放運動》は、極めてエクストリームな品種改良生物を逆品種改良して祖先へと戻す行為を通じ、人間が自然を作り変える技術、エゴ、変態性を映し出します。家系図は金魚からフナに戻す7年間分の記録写真で構成し、映像は金魚がどう変化したかをできるだけ歴史的かつ科学的に記録しています。

《パペルのランドスケープ》シリーズは2年前から取り組んでいる、風景の中にある輪郭線のパターンから文字を作り出していく作品です。今回は岐阜県にちなみ、松尾芭蕉の「奥の細道」を題材にしました。大垣駅の南にある、芭蕉が江戸へ帰っていく時に使った水門川の風景写真の輪郭線から、奥の細道が含有する漢字を生成しています。「月日は百代の過客」から始まり、大垣市で詠んだ「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」で終わります。

florian gadenne + miki okubo



「ホロピオント」というキーワードは、一本の木をめぐって共生する多種の生物、細菌のような微小な生物を内包する宿主、こうしたスーパー生物です。大きな二つの絵画は詳細な生物のリストをもとに描きました。《Trgone》という剪定に関する絵は、生物が発する音をもとに作った音楽を伴っているので、ヘッドフォンで聴いてください。剪定で切られたところが穴になって動物の巣となり、菌類の餌になります。木の光合成による養分が根を通じて菌類に届けられるという、土の中でも興味深い共生があります。

ドングリは多くの人にとって身近な木の実でありながら、日々の生活の中でじっくり見ることがありません。今日私たちは自然保護を訴え環境保全活動をする選択肢がありますが、自分が住む環境そのものを深く知らないことがあります。この参加型のインスタレーションは、手にとってじっくり見て模倣するという努力を促し、対象を知ることを問います。

西脇直毅



私がなぜ増殖する猫の絵を描くのかと申しますと、3つのことが考えられます。1つには描いた猫の形態が連続的に描くことに適しています。描いた猫の形が次の猫の形を待っています、2つ目は間違わないで書けることです。例えば(コンピューター)プログラムだと間違えると止まってしまうのですが、猫には間違いがないので、描いたら描いた分だけ確実に増殖することができます。一見間違いに見えてもその間違いに見えた形から新たな猫が生まれるので間違いがありません。3つ目は飽きないでいくらかでも描くことができることです。なぜ飽きないのかは自分でもよくわかりません。しかしながら猫を描くための集中力はあります。絵を描いて楽しいと思うことはありませんが猫が画面が埋まってくると喜びになります。

そして最後に私の絵をご覧になった方が猫みたいな笑顔になっていただければ真の幸いであり、嬉しくもあり、絵を描く動機にもなります。ありがとうございます。

クワクポリョウタ



《LOST diversion》のdiversionには「散歩、迂回」という意味があります。中学生の頃レコードを買ったThe Art of Noiseというバンドには、サンプリングマシンを使った《Beat Box》というシリーズがあります。ライブではないのでテイク違いでもなく、リミックスとも違う、オリジナルが元から存在しない作品です。また歌手が大ヒット曲を長年歌い続けるようなとき、やがて譜面から離れて音程やリズムが変わっていく中に、その人の葛藤が見えます。画家の中にも同じ主題や手法を続ける人がおり、繰り返して良くなることがあります。

本展で展示している《LOST diversion》は、14年間取り組んできた《LOST》シリーズの一つで、2010年に制作した最初の《10番目の感傷》以降、同じ技法で違うモチーフを使った作品に番号を振りながら、国内外で50回程度展示しています。正直にいうと私は同じことを続けるのを苦痛に感じることもありますが、本作では作品制作の「エコロジー」に取り組みました。私、企画者、美術館はエコロジーの一部であり、作品がどう生き延びていくかが一つのテーマです。

作品リスト

j-1	(digital) Soba Choko	ジャン＝ルイ・ボワシエ／Jean-Louis BOISSIER	2024年	陶、ビデオ、写真、テキスト	インスタレーション
k-1	LOST (Diversion)	クワクポリョウタ／KUWAKUBO Ryota	2025年	日用品、鉄道模型、LED	インスタレーション
n-1	刺青の男／Tattooed Man	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2004-07年頃	雑誌に丸ペン、インク	27.5×20.7cm (描画ページ)
n-2	刺青の女4／Tattooed Woman 4	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2024年	半光沢紙にインクジェットプリント	72.3×51.0cm
n-3	刺青の女7／Tattooed Woman 7	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2024年	半光沢紙にインクジェットプリント	72.3×51.0cm
n-4	刺青の女8／Tattooed Woman 8	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2024年	半光沢紙にインクジェットプリント	118.9×84.1cm
n-5	意識された呼吸／Conscious Breathing	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2022年	ロールケント紙にカラーボールペン	440.0×135.5cm
n-6	猫文尽くし／Full of Cats	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2012年	画用紙にボールペン	108.7×77.0cm
n-7	山、ネコ、さかな／Mountains, Cats, Fish	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2023年	ケント紙にボールペン、カラーボールペン、色鉛筆	115.0×135.5cm
n-8	赤色のへびとネコ／Red Snakes and Cats	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2023年	ケント紙にボールペン、カラーボールペン	77.0×108.7cm
n-9	木とネコ／Tree and Cats	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2023年	ケント紙にボールペン、カラーボールペン	77.0×108.7cm
n-10	お米猫／Rice Wax Cats	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2024-25年	ガラスに水溶性チョーク	展示室出入口ガラス面
n-11	写猫／Sya-byo (Transcribing Cats)	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2024年	美濃雁皮紙に筆ペン	20.5×43.5cm
n-12	写猫会 (写猫会手本原画)／Sha-byo Experience	西脇直毅／NISHIWAKI Naoki	2024年	美濃雁皮紙に鉛筆	
f-1	L'Arbre-Monde／The World Tree 2024年 以下4つの部分から成るインスタレーション				
①	Trogne – arbre habitat／Trogne – tree habitat	florian gadenne + miki okubo	2024年	紙に墨、水彩絵具、ガッシュ、音響	180.0×240.0cm
②	Le Chêne Monde／The Oak World	florian gadenne + miki okubo	2022年	紙に墨、水彩絵具、ガッシュ	121.8×90.0cm
③	『L'Arbre-Monde』のためのイラストレーション ／Illustrations for "The Tree-World"	florian gadenne + miki okubo	2022-24年	紙に墨、水彩絵具、ガッシュ	インスタレーション
④	Gland Monde／Acorn World	florian gadenne + miki okubo	2024年	磁土、小ブロック状の油粘土	インスタレーション
i-1	金魚解放運動／Goldfish Liberation Movement	石橋友也／ISHIBASHI Tomoya	2012-17年 (2024年改作)	ビデオ (5:33)、記録写真による家系図	インスタレーション
i-2	Self-reference Microscope	石橋友也／ISHIBASHI Tomoya	2025年	川で採集した自然物や廃棄物、インクジェットプリント、ビデオ (6:14)	インスタレーション
i-3	バベルのランドスケープ／Landscapes of Babel	石橋友也、新倉健人、吉田竜二 ／ISHIBASHI Tomoya, NIIKURA Kento, YOSHIDA Ryuji	2023年 -	独自アルゴリズム処理によるビデオ (11:04)	可変

繭／COCOON：技術から思考するエコロジー

岐阜県美術館【展示室2】

2025年1月10日 |金| - 3月9日 |日|

●作家によるギャラリートーク

1月11日 |土| 14:00 - 15:30

在廊作家：ジャン＝ルイ・ボワシエ、クワクボリョウタ、florian gadenne+miki okubo、石橋友也

●担当学芸員によるナイトギャラリートーク

1月17日 |金| 18:30 - 19:00

●ナンヤローネアートツアー

1月19日 |日| 14:00 - 15:30

●アーティストトーク

3月8日 |土| 14:00 - 15:30

出演作家：クワクボリョウタ、大久保美紀（florian gadenne+miki okubo）

編集：鳥羽都子（岐阜県美術館）、大久保美紀（IAMAS）

デザイン：雨宮由夏

印刷：株式会社弘文社

発行：2025年3月

web版

芸術は、繭である